
愚者は踊る

君河月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚者は踊る

【Nコード】

N9710W

【作者名】

君河月

【あらすじ】

異世界召喚冒険もの。気がつけば異世界に勇者として召喚された俺、このまま流されていけば面倒臭い事になるのは目に見えてる。誰が連中の思い通りになってやるもんか……。同じく召喚された女の子と共に、逃げ出そうと思う。

主人公は最強と云うよりもチートです。テンプレ、ご都合主義あり。初めて文章を書きます、練習も兼ねておりますので、拙い面も多いと思いますが、それでも宜しければ。

……それで、ここは何処ですか？

ん？ああ、いきなりだけど、俺の説明をしておこう。

俺の名前は、雪村遙、女顔がコンプレックスの、ちょっとおちゃめな16歳だ。

朝早く……と言っても8時位だったが、学校に登校の途中、昨日は深夜遅くまで、B級映画を見ていたのが悪かったのか、寝惚け眼で歩いていたんだが、気がついたら知らない場所に立っていました……。

あれ？寝惚けて変な所に出ちゃいました？

——いやいやいや、待ってくれ、いくら寝惚けていたとしても、こんな通い慣れた道で、こんな場所に来れる訳が無いだろう。

……それで、ここは何処ですか？

薄暗い十畳程の空間に、足元に輝く魔方陣、奇妙な格好のジジイ共、甲冑に剣や槍で武装している兵士？があり、昔見たアニメのワンシーンの様だなと、場違いな事を考えながら、文字通り開いた口が塞がらなかった。

「おお、見事だ、こつも容易く成功させるとは」

「ハッ！ 有難う御座います」

「で、こやつも勇者であろう?。」

「はい、恐らくそうかとは思われますが、まだ判断は致し兼ねます、この様な間抜け面をしている者が、勇者かと思うと甚だ不本意では御座います。」

——ムッ! 間抜け面って、俺のことですか、俺のことですね。
さっき迄呆けた顔をしていたと思うから。しかしこいつらの、人を
値踏みするような目は、不愉快極まりない。

「まあよい、使えるか使えぬかは、後で試せばよい」

「はい。そうかと思えます」

ローブ? を着ているのと、宝石等で華美に着飾っているジジイ
が居るが。二人とも、どう見ても日本人には見えない。兵士は兜を
被っているので、俺には判断しようが無いのだけど。

あれ? そう言えば、「こやつも」とか言つて無かったか、何故
に複数形なのだ?

——んん? さっきは呆然としていて、気が付かなかったが、部
屋の隅に女の子がいる。

黒髪ロング、美少女と言う存在を指すのなら、彼女の事を言うん
だろうなと思わせる。容姿の持ち主だった。しかし、どこかの学校
の制服を着ているし、どう見たってあれ……日本人だよな?

多分だろうけど、彼女もここに連れてこられたのだろうか、酷く
怯えている様に見える。

「それより、大事があつてはことになる、こやつらに魔術をかけておけ」

「ハッ！——畏まりました」

隅に立っていた兵士に、ローブを着たジジイが命令をし、俺を彼女のそばに引つ張って行つた。

俺を彼女の横に立たせると、ローブを着たジジイが、ボソボソと何かを唱えだした。

魔術つて言っていたよな？ 魔術なんて物があるのか？

……つて、魔術ですか！？

……仮にあるんだとして、何の魔術なんだ？ 嫌な予感がする。
……寧ろ、嫌な予感しかないが、気付けば魔術？ が完成していた。
た。

『この者たちに、臣なる者への隷属を』

ローブを着たジジイが、手に持っていた杖を、俺達の方に向けてと、杖先から怪しい光が、俺達を包んだ。俺は驚き、反射でしゃがみ込んだ。しかし光こそ浴びてはいるが、何とも無い。

んん？ これが魔術？ ふと気になり、同じように光を浴びている、彼女の方を横目で見てみると、何故か苦しんでいる様に見て取れた。

——あれ？ 何で苦しそうにしているんだ。俺は驚きはしたが、特に痛かったり苦しかったり、しないのだが……？

彼女が苦しんでいるのに、俺だけ平気なもの、もしかしたら、怪しく写るかもしれない。俺は誤魔化すように、苦しむ演技をしていた。すると次第に光が収まっていく。

「どうだ、魔術はかったか？」

「はい、《隷属の魔術》は問題ありませんでした」

演劇経験が、特にあった訳では無かったが、特に怪しまれずに済んだようだ。

しかし《隷属の魔術》ってなんだ？どんな魔術を俺達はかけられたんだ。

隷属って事は、何かに従わせる魔術か何かか……？

「そうか、良くやった！ では、わしはもう戻るが、後の事は任せたぞ」

「はい、お任せ下さいませ」

ローブを着たジジイが、恭しくお辞儀すると。着飾ったジジイが、部屋から出て行った。

「おい！ こやつらを連れておけ」

ローブを着たジジイが、兵士に命令をし、俺達を、何処かに連れて行くこうとしている。

抵抗しようかとも考えたが、俺が暴れることで、彼女にも迷惑をかけるかもしれ無い。

なにより、武装している相手に敵うほど、喧嘩に自信がある訳で

もないので、俺は抑えておいた。

俺達が連れてこられたのは、さっきいた召喚の間（便宜上俺が命名）より、倍ほど広さを持つ部屋だった。

とりあえず、連れて行かれている間に分かった事は、ここが地球では無いって事だ。

空に太陽が、大小で2個存在した。

地球に太陽は2個も無いからな。

日照問題とか、紫外線とか、大丈夫なんですかね？

兵士達に連れて来られた部屋には、メイドさんが居た……もう一度言うが、メイドさんが部屋で待っていた。

……なんでメイドさんなんだ？

整えられた銀髪、気の強そうな瞳で、小柄ながら出る場所は出ている。

所謂、トランジスタグラマってヤツだろう。

それにしてもこちらに来てから、美人と出会う機会が多いなど、俺は埒も無い事が思い浮かんだ。

兵士は俺達を椅子に座らせると、入り口の前を陣取った。

俺達を逃がさないって、意思表示でしょうか？

……メイドさんは俺達が着席するのを確認すると、立ち上がり。

「初めまして勇者様方、この度勇者様のお世話及び、事情等の説明を任せて下ります。

侍女長のセイナーレ・パルメイラと申します。以後お見知りおきを」

メイドさん改めセイナーレは、とても優雅にお辞儀をした。
もの凄く絵になる光景だなど、見とれていたら。

「あ……あの、わたしを、ここから帰していただけますか」

ここ迄一切喋らなかった彼女が、口をひらいた。

「……わ、わたし、勇者なんかでは無いです。お願いですから、わたしを元の場所に帰して……下さい」

語尾が少し上ずっていた。いきなりこんな場所に、連れてこられたら、そりゃ怖いだろうな。

「申し訳御座いません。わたくし私には、そのご希望を叶える事は参りません」

「そんな！　なんでですか!？」

「私は、その様な判断を、任されている立場では下りません。

もし、その様な判断が出来ますとしたら、国王陛下のみかと思えます」

「だったら、その国王様に貴女から言って下さい」

「申し訳ありませんが、それも叶いません」

「そんな、なんで!？」

「私には意見はおろか、お目通りすら叶いませんから」

「そ、そんなぁ……」

——いきなり連れて来られて、それで帰れませんって。納得する方が無理だろう。俺だって無理だ、だって残してきた物あるもん。……ゲームとか積んでいた本とか……あれ？ 悲しくないのだから汗が。

って、ヤバイ——もし帰れないのだとしたら、誰か！ 俺の部屋のPCを爆破してくれ!？

……なんて俺は心の声をおくびにも出さない、この場でセイナーに、そんな事を言っても詮無いと思ったので、この場では他になんて言っていることを、訊く事にする。

「事情の説明って言ったよな。だったら訊きたいんだが、ここは日本では無いのか？」

太陽が2個あるんだから、日本では有り得無い場所なんだけど、確認の為に訊いておいた。

「はい、ここは日本と仰る、場所では御座いません。私達が住むこの世界は『ガイア』と申し。」

そして、今、現在居ります場所は、『レミール大陸』にあります。
『神光国家プレクスタ』と申します」

「では、ここは地球では無いのかな？」

「はい」

嗚呼……案の定、地球ですら無かったか。
彼女の方も、訊いた事の無い地名を出されて、困惑の表情を浮かべていた。

「ここが日本じゃないんだとしたら、何で俺は言葉が通じるんだ？
ここで使用されている言語が、日本語って、訳じゃ無いんだろっ」

「はい、こちらで使用されております。言語はエスペラント語と申します」

へ？——へえ、エスペラント語ねえ……地球で使われてる物とは、別物だと思うが、ここでエスペラント語を、聞くとは思わなかった。

「だったらなんで、俺には解るんだ？」

「私もきちんとは理解しておりませんが、勇者様方には、此方の言語は、そう云う物だと考えて貰って貰って構いません」

いまいち分かり辛かったが、現実言葉自体は、通じているのだから、そう云う風なものだと、考えるしかないか。

「で、俺……いや俺達の事を勇者……だなんて呼んでいるが、結局

の所、なんで俺達はここに呼ばれたんだ？」

——勇者で召喚だなんて、薄々感じてはいたが、案の定、予想通りの答えが返ってきた。

「勇者様方が呼ばれました理由——と申しますか。お願いを申します。先程もご説明致しました。ここ『ガイア』には、嘗て魔王と呼ばれる存在が、封印されておりました。しかし、その封印が弱まり、魔王が甦ってしまいました。

その影響で、大陸全土の魔物達も活性化し、魔物により人的被害が増えてき、それ故に、国より出での開拓も儘ならず。国同士が肥沃な大地を求め、戦争までおき始めたのです。それを憂えた吾が国は、勇者様方を御呼びしたのです。」

まあ、想像通りと言えば想像通りか……しかし、魔王と勇者……ねえ？

どこぞの御伽噺か、良くあるRPGのテンプレみたいだな。で、それを俺達にしるってか？

……嗚呼、何て面倒臭い。

「勇者だなんて、わたしにはそんな力ありませんよ!？」

「それはご安心ください、勇者様方は、こちらに召喚されました時点で、身体能力が強化され、特別な力に目覚めていると思います」

身体能力強化に、特別な力ねえ？ ご都合主義もいい所だな。

——少し気にもなったので、訊いてみた

「それが分かるって事は、他にも、勇者ってのはいるのか？」

「いいえ、私を知る限りでは、勇者様の召喚は行われて下りません。他国についても同じだと思われます。そして、その情報につきましては、過去の勇者様達について書かれている、文献の記述を基より得た知識で御座います」

つまり過去、俺達のように、ここに呼ばれた人間が入るって事が……文献になるって事は、かなり昔の事なんだろう。

「ではその勇者が、魔王を封印したのか？」

「……いえ、私はそこまで存じて下りません」

何でここで、言い黙る必要があるんだ？ 力の事とかが、そこまですで分かっていて、そこが分からないとか……魔王封印とかでは無く、違う目的にでも、利用されたのか？

「だったらその勇者は、目的を果たした後はどうなったんだ？」

「……存じ上げて下りません」

都合の悪い事には濁すか黙りですか……まあいい、後で調べれば分かるかもしれない。

それよりも、俺が尤も気になっていたことを、訊いてみる事にした。

「で《隷属の魔術》とはなんだ？」

「《隷属の魔術》……ですか」

「ああそつだ、俺がここに召喚された時に、ローブを着たジジイにかけられた物だ」

セイナーレは少し逡巡したが、答えた

「《隷属の魔術》とは、対象を永続的に隷属させる制約魔術となります。

恐らくですが、勇者様には、プレクスタの王族に服従を誓う物を使用されたかと思われます」

——クソッ！ 予想通りかよ……それで何が勇者だ！隷属とか服従って、奴隷と大差無いじゃないかよ！

横で話を聞いていた彼女は、絶句していた。

「具体的にはどうなるんだ？ 例えばそれに逆らったとしたら」

「かけられた時に経験が御座いますでしょうが、王家の者の意に沿わぬ行動をすれば、魔術をかけられました時の、数倍の痛みが全身を襲います」

痛み……？ 俺はあの時、全く痛いとか感じ無かったんだが。しかし、彼女の方は、それを聞き更に蒼褪めた顔をしていた。

「で、それを解く方法はあるのか？」

「……いえ」

「わかった、つまりは俺達に拒否権は無いって事だな」

「……………」

なるほど——帰れるかどうかでは無く、帰さない心算^{つもり}なのだ。
そんな魔術を使うくらいだ、態々奴隷にそんな心積もりをする訳が
無い。

……お願い誰か！ 今すぐ俺のPCのHDDを破壊して！

「何故、それを話そうと思ったんだ？ それを自分の判断で、言っ
て良かったのか？」

「いずれ勇者様方には、お耳に入ると思いますので」

遅いか早いかの違いでしかないと、云う事だろう。そうだよな、
どうせ身を持ってその効果を、知る事になるかも知れないのだ。

「勇者様方に、こちらをお渡ししたいと思います」

セイナーレは立ち上がると、横にある机の上から、白いプレー
トを取り出し、俺達に渡してきた。俺達にプレートを受け渡すと、
セイナーレが説明を続けた。

「ではまず、こちらに血を一滴垂らしてみてください」

んん？ 血……だと？ それを訊いて俺達は訝しがんだ。

「勇者様方は、ご自身の能力を把握しておられないと思います、で
すのでこちらをご用意させて頂きました。元々こちらプレートは、

ギルドで使用されて下ります物で、血を垂らしますと、その方の能力などが登録され、確認する事が可能となります。」

なるほど、ゲームとかでよくある、ステータスメニューみたいなもんか。さっきの説明を聞いた後で、血を垂らせとか言われたら、そりゃあ警戒もするだろう。

しかし、やらなければ話が進まないし、現状把握の為に、やっておいた方が、良いのだろう。そうでなくても、俺達に、拒否権など無いのだから。

俺は親指を噛み、指先を出血させた……血がボタボタ垂れている。一滴所では無くなってしまった。思い切って、噛み過ぎてしまのだから。已むを得ず、プレートに血を垂らした。あー痛い。

彼女の方も、俺がプレートに、血を垂らすのを確認すると、セイナレから針を借り、指先を軽く刺し、血を垂らしていた。……って、針あるのかよ!?

暫くすると、プレートに青白い文字が浮かび上がった。

名前：雪村遥

AGE：16

SEX：男

LV：1

JOB：愚者

HP：62

MP：1084

STR：66

VIT：52

AGI：71
DEX：101
INT：4712
RST：9877
LUC：558
称号：なし
特性：無詠唱、魔術感知、幻影魔術無効、制約魔術無効、攻性魔術無効
装備：学園制服
祝福：なし
ギルド：なし

未だ名乗って無い筈の、俺の名前や年齢が、正確に書かれている。確かに便利だな。ふむ——^{ステータス}それでこれが、俺の能力か……。しかし、この職業《愚者^{フール}》って、何だよこれ？

それに何というか……数値が、魔術特化しすぎだろう。こんなアンバランスな能力で、まともに戦う事が出来るのか、俺？

彼女の方も文字が浮かんだらしい。らしいってのは、俺には、彼女のプレート^{プレート}の文字が、読めないのだが、彼女は難しい顔で、プレートを睨み付けていたからだ。

俺はどういうことだと、セイナールを見た。

「言い忘れておりましたが、こちらのプレートは、ご本人様と、ご本人様が許可された方のみ、内容を確認する事が可能になります」

——なるほど、そう云う事ですか。こんな世界なのに個人情報保護に御親切な事で。

「そういえば、過去の勇者も俺達みたいに、二人とか三人で呼ばれたのか？」

「いいえ、私が知っている限りですが、召喚されました勇者様は、お一人づつだったと思います」

「では、何故今回は、二人も呼ばれたんだ？」

「いえ、私は存じて下りません」

多分だが、どちらかが保険だろうな。なんせ俺の職業が《愚者^{フール}》なんだし。もしくはそれだけ、この国の人間は切羽詰っていたのか。

「他に、何かご質問は御座いますか」

「いや、今はもういい」

これ以上突っ込んで、答えて貰えるとも思えないし。

「はい、わたしも大丈夫です」

「左様で御座いますか、了解致しました——では、勇者様同士で、お話もあると思います。」

私共は暫し、此处を離れさせて頂きたいと思います」

ん？ 良いのか、俺達だけで話をさせて、逃げる為の算段をつけるとは思わないのか？ って、ああ——なるほど、さっき言っていた《隷属の魔術》の効果か。

……つまりそれだけ、その魔術の効果に自信があるって事ですか。

「では、暫し失礼致します」

セイナールは俺たちに頭を下げると、扉の前を陣取っていた兵士を連れて、本当に部屋から出て行った。……本当に出て行ったよ。

「……………」

お話つて言われても、何を切り出せば良いんだろうな……？ しまあ、お互い黙って見詰め合つて、どんなお見合いだよ！？
とりあえず、思いついた事を話題として、思い切つて声をかける事にした。

……意外にシャイボーイなんだよ俺。

「君は……日本人だよね？」

「えっと。はい、そうです」

——やはり日本人か、勇者つて云うのは日本人しか呼ばれないのか？ まあいいや、これも後で調べてみたらわかるかも知れない。

「ああ、良かった。俺は雪村遥つて言うんだ。よろしく」

俺は彼女に、手を差し出した。

「わたしは五十鈴雪緒と言います。よろしくお願いします。雪村さん」

彼女改め五十鈴さんは、俺の差し出した手を、ジッと見つめていた。

「俺の事は遥で良いよ、後握手のつもりだったんだけど、五十鈴さんは嫌……だったかな？」

「い、いえ、そんな事はありません。あと、わたしも雪緒で良いですよ」

雪緒は俺の科白を聞き、少し躊躇いながらも、手を握ってきた。

すべすべして、綺麗な手だなーと、思っていたら。雪緒は、俺の顔と手を見つめながら、尋ねてきた。

「え、えっーと、あの、遥さんって男性なんですか？」

……………ハイ？

「えっ！？ チョットまって、今まで俺の事、女だと思っていたの！？

俺、自分の事を俺って呼んでるんだよ、この服だってどう見ても男物だよ？」

この格好どう見たって男だろう、学校の制服はブレザーだけど、ズボン穿いているのに。ここにきて気が付くとか……確かに実名と相まって、間違われる事あるけどさ。

寧ろ、間違われる事ばかりだけどさ。この格好の時くらいは、気付けて欲しかったよ。

「ご、ごめんなさい、綺麗な顔をされていたので、てっきり男装を

された、女性なのかと……」

グサツグサツ、ま、まさか敵でもない筈の彼女に、ダメージを与えられるとは思わなかった。

既にかんりのダメージを受けてはいるが、これ以上言われると、さすがに立ち直れそうにも無いので、急いで話題を変えることにした。

「そうだ！ 雪緒は歳幾つなのかな？ 見た感じだと、俺と大差無いと思うのだけど」

「わたしは清蘭学園の二年で、17になります」

「へ？ 清蘭？……清蘭って、あの清蘭？」

「は……はい、恐らくその清蘭だと」

清蘭と言えば、元の日本では超有名なお嬢様学校ではないか、学力のレベルも然る事ながら、容姿のレベルの高さも有名な学校だ、雪緒の顔を見れば、そのレベルの確かさを垣間見れるが。

「そうかー、清蘭かー」

しみじみ言っている俺、傍から見たら、気持ち悪い事この上ないだろう。

——いや、だってさ、清蘭って言ったら凄いなだけ、元の世界で、清蘭に知り合いが居るって言ったら、羨ましがられるだろうな……。しかし今考える様な事でも無いし、頭を切り替えるか。

「俺はしがない高校の二年、雪緒と同じ年って事になるのかな、だ

から俺に、さんづけなんか要らないから」

「あ……そうなんですか」

同年代と聞いて、雪緒ははにかんだ笑顔を見せた。——うおっ、かなり可愛いです。

「それで雪緒は、ここに来るまでの事を憶えているか？」

「ここに……ですか？」

「そう、思い出せる範囲で構わないから」

雪緒は、悩むように首を傾げながら、答えてくれた。

「わたしは学校から、帰宅の途中だったんですが、気が付いたらあの場所に立って居ました」

「……そうか」

「それ以上の事は、ちょっと思い出せそうに無いです」

——ふむ、なるほど、状況は、俺の時と大差は無いのだな。それにしても、帰宅途中……か、俺は登校中に攫われたが、時系列が違うのか？

「日にちとかは憶えているかい？」

「はい、確か10月14日だったと思います。時間までは……」

俺も確か10月14日だった筈だから、俺の方が先には飛ばされていたのか……。

まあしかし、このまま考えていても仕方ない。

「あのさ良かったら、そのプレートを見せて貰っても良いかな？」

「はい、遥くんにだつたら良いですよ」

おおう、よくこんな短い期間で、彼女の信頼を得られたもんだな俺。

——まあ同郷出身で、同年代つてのが、大きいのだろうけど。

……しかしまあ、くん付けか、この際妥協案として仕方ないか。

雪緒からプレートを受け取ると、さつきは見えなかった文字が見える様になっていた。

確かに本人と、本人が許可した人しか見えないようだな。少々関心しながらも、俺はプレートの内容に目を通した。

名前：五十鈴雪緒

AGE：17

SEX：女

LV：1

JOB：勇者

HP：204

MP：138

STR：176

VIT：189

AGI：186

DEX：181

INT:112
RST:147
LUC:988
称号:プレクスタの隷奴
特性:危機感知、高速治癒、高速移動、高速詠唱、見切り
装備:清蘭学園制服
祝福:なし
ギルド:なし

これが雪緒の能力か……職業《勇者》って事は、雪緒が勇者なのか。本来は、この位の数値が普通なのだろうか？だとすれば俺の数値は極端すぎるな。

何より俺は、雪緒と較べるとライフと攻撃力が低すぎる。紙と言ってもいいかも知れない、本当に俺は戦えるのか？

それに……んん？——この称号の《プレクスタの隷奴》ってなんだ？

俺の方には書かれて無かったよな。俺は確認の為に、プレートを取り出し見てみた。

名前:雪村遥
AGE:16
SEX:男
LV:1
JOB:愚者
HP:62
MP:1084
STR:66

VIT:52
AGI:71
DEX:101
INT:4712
RST:9877
LUC:558
称号:なし
特性:無詠唱、魔術感知、幻影魔術無効、制約魔術無効、攻性魔術無効
装備:学園制服
祝福:なし
ギルド:なし

やはり俺の方には、称号自体が書かれて入ない。職業の違いは良いが、俺の方に無いのは何故なんだ……？

そう言えばセイナーレが、俺達にかけられた《隷属の魔術》は、制約魔術とか言ってなかったか。

——俺の特性の中に、《制約魔術無効》なる物が書かれているが、もしかして、この特性で無効化されたのか？

……だとすれば、俺のこの状態を他の人間に、知られる訳にはいかなかった。

もしばれたら、他の手段を使われかねないし、何より首輪が繋がっていない犬を、奴らが飼おう何て思わないだろうし。

不幸中の幸いだが、このプレートは俺と許可した相手にしか見えない。

だからと言って、これは慎重に取り扱わなければ為らないのは確

かだが……。

これからの対応に思い耽っていると、雪緒の声で現実には引き戻された。

「あたしも、遥くんのを見せて貰っても、良いですか？」

——これは如何^{いかに}するべきだろうか、断ると言う選択肢も無くは無いが。

下手に隠し立てをして、後で知られてしまうと、今ある彼女の信頼を失いかねない……今の俺にとってそれは、あまり宜しくない。

本当は見せない方が良いのだろうけど、これからの事を考えれば、俺一人でやるにも限界がある。

……彼女に素直に見せて、手伝わせた方が良いか。

「ああいいよ。だけどこれを見て、気になる事もあるかも知れないが、なるべく声には出さない様に気をつけて貰えるかな」

「？——わかりました」

雪緒は良くわかってなかったみたいだが、俺は手に持っていた、自分と雪緒のプレートを手渡した。

雪緒はそれを受け取ると、俺のプレートに目を通した。

「……え？」

——ああ、やはり雪緒は気が付いたようだ、俺のと自分のを見比べている。

気にはなるだろう、隷奴って書かれているものが、俺の方には無いのだから。

もしかしたら、それが自分を縛っている、魔術なのかも知れないのだから。

雪緒は困惑した表情を、俺の方に向け訊いてきた。

「あの……これって、どうして……？」

気には付いたが、理解は出来ては無い様だった。恐らく雪緒は、RPGゲームの類をした事が無いのであろう。

いやもしくは、薄々は気付いているのだが、確認の為に俺に訊いてきているのかも知れない。

……しかし、如何答えた物かね。

この部屋は、盗聴されているのかも知れないしな。今まで話していた、俺達の会話を、ここの奴ら聞かれている可能性は十分ある。俺が奴らと同じ立場だったら、そうしてるし。そう行動する。

部屋の文明レベルを伺うからに、盗聴器なる、ハイテクな物は、存在しないだろうが、魔術の類で出来るかもしれないし。訊けるかも知れない

……ふと、そういえば、俺の特性の中に、《魔術感知》^{アビリティ}なる物があつたよな。もしそれが、魔術無効化みたいに、使えるのならば、調べられるかもしれない。

魔術——か、いまいち良くはわから無いが、あのジジイが使った《隷属の魔術》をイメージしながら、眼を瞑り辺りを集中してみた。

……すると何と無くだが、大氣中にフワフワと漂う魔力^{マナ}の流れを感じた。

初めてなのに、とても懐かしく感じる、空間の違和感。

……これが魔術か……俺は一度魔力^{マナ}の存在——流れを感じ始めた
ら、次第に辺りに存在する魔術を、感覚でだが分かり始めた。

今もしこれを、人に説明しろと言われても、そう云うものだし
か、説明しようが無いのだが、確かに俺は今、魔術を理解している
そう知っているのだ。魔術を。

更に、この部屋を重点的に、魔術を使用されていないか探ってみ
たが、魔術を使用された跡が無かった。

如何言う事だ？ 今だから判るが、この部屋には何の魔術も仕掛
けられていなかった。何の警戒もせず、俺達に会話を許したのか？

——いや、それだけ俺達にかけたあの魔術に、自信があつたつて
事なのか……。

でも今まで、俺みたいな例外も居なかったのか？

まあいいか、一々対策を考えなくて済むのだから、それならそれ
で好都合だ。

先程の雪緒の疑問に、少し声を控えながらも、俺は答える事にし
た。

「多分……だけど、俺には、魔術の類が効かないのかも知れない。
プレートを見て分かるかも知れないが、俺には魔術無効^{アビリティ}なる特性
を、持っているらしい」

「……だとしたら、遥くンだけでもここから逃げ出せるのでは？」

俺は首を横に振りながら、答えを返した。

「いや、元の世界に帰れるかどうか分からないし、現状情報が足りない、それに俺だけが逃げ出せば、雪緒に当たりが強くなるかもしれない」

「そんな！ わたしは大丈夫ですから」

雪緒も薄々気付いてはいるのだらうだろう、奴らは俺たちを帰す気が無いのを。

ただ、簡単に現実を受け入れられるほど、俺は大人ではない。

「それに……」

「それになんですか？」

「俺が逃げた事で、その埋め合わせをする為に奴らが、再び勇者召喚を使うかもしれない」

「——あ！」

雪緒も、思い当たったのであろう、奴らは使い捨ての駒のように、地球から人間を呼ぶ可能性があることを……。

俺達を呼び、いきなり《隷属の魔術》何て物を使ってくる連中だ。俺が消えれば、直ぐにでも代わり人間を呼んだりするだろう。

——それは避けたい。此方の世界の住人がどうなるかは、俺の知った事ではない。

が、しかし、俺のせいで、地球からまた人が呼ばれるような事になるのは、それはなるべく避けておきたい。

「だから……もし逃げるのだとしても、俺達を召喚した方法を破壊（こわ）した上で……。」

雪緒、君も一緒では無いと駄目だ」

「——あ、えつと。あ……あの、ありがとうございます」

——もの凄く嬉しそうな顔を、されてしまった。

俺としては、そう云う心算^{つもり}で、言ったのでは無かったのだが。

……まあ、いいか、好感を持たれて悪い事は何も無いのだから。

「だからこの事は伏せておいて欲しい。それにもしかしたら、俺の能力^{ちから}で、雪緒にかかっている魔術も、なんとか出来るかも知れないから」

「はい！ わかりました。あたしにも出来る事があるのでしたら、言ってくださいね」

これがゲームだったら、好感度上昇とか表示されるのかね。

「——ああ、ありがとう。とりあえず暫くは、従順な振りをして情報を集めよう。」

ここを逃げるのだとしても、帰る為の方法や生きて行く為にも、基礎的な知識は必要だから」

——そう、まずは情報だ……俺達が住んでいた日本は、情報化社会だった。

情報の重要性は、嫌と言うほど理解している。

なのに今の俺達は、此方の世界の事を全く知らない。

生きる為にはお金だって必要になる、それなのに、使用されている通貨単位ですら、今の俺達は知らない……。

「はい！」

——さあ踊ろう。俺達は操り人形では無い事を思い知らせる為に。

第一話 …… 現実って何時も残酷ですよ。

「おはようございます」

……う、うーん…… もう少し寝かせてくれよ、連日徹夜になってしまい、未だ眠くてしょうがないのだ……。

——って、あれ？ 俺は一人暮らしだったよな？
起こしてくれる人なんか居なかったよな？

嗚呼、誰か可愛い義妹や、幼馴染が起こしに来てくれないかな……。

いや、もうなんと云うか…… 現実って何時も残酷ですよ。

……ああ…… そうだ…… 次第に眠気が覚めて行き、昨日の出来事が甦って来た。

俺は——いや俺達はか、クソジジイ共に、異世界に召喚された勇者なんて云う存在らしい。

それはなんとという幻想。^{ファンタジー} いや、現実^{リアル}はゲームほど都合良くは無かったのだけど。

召喚^{スト}、有無を言わせず強制魔術…… 嗚呼、なんて見事な利己主義^{エゴイ}者共。

ここに居る人間は、力ある者を屈服させることでしか、安心を得られ無いらしい。

押さえつける事でしか、人は動かないと思っ^{ファンタジー}ているらしい。
それはとても素晴らしい、なんともくだらない幻想。

ドアのノック音が響き、扉の向こうから声が聞こえてきた。

「おはようございます勇者様。そろそろお目覚めの時間になります」

……なるほど、この声で俺は微睡みの世界から現実に取り戻されたのか。

誰だ？　と思いついたが、この世界で俺を起こしに来るような人間は限られている。

……俺が返答しなかった為、扉を叩く音が再度響いた。

ベットから起き上がると、仕方なしに俺は扉の向こうに声を返した。

「ああ！　起きている」

「失礼致します。朝食の準備が整っております」

俺の返答を聞き部屋に這入ってきたのは、やはりセイナーレだった。

侍女長とか言ってたよな、そんなお方が態々俺なんかを、起こしに来るなんてご苦労様な事で。……いや、だからこそか？

「準備が整いましたら、食堂の方までお越しください」

「ああ、わかった、けど俺は食堂の場所がわからんぞ」

「それは失礼致しました。では、準備が整いましたら、部屋の外に居ります侍女にお声をお掛け下さい。

その者が勇者様を食堂迄ご案内致します」

「わかった、それでゆきお……もう一人の勇者は如何したんだ？」

「そちらの勇者様も、これから私がご連絡に伺います」

雪緒……もう一人の勇者は当然の事だが、別の部屋で寝ている。
俺達が、セイナーレから説明を受けた部屋から、寝泊りする為の
部屋に移ったのだが。

最初に俺達二人は、ツインベットがある部屋に案内された……。

そうです、察しの良い方はもうお気づきかと思いますが……セイ
ナーレも俺の事を女だと思っていたらしい。

女の子同士だから、同じ部屋で良いやって考えだっただろう。
勇者で女の子、容姿から同郷の人間だろうと察せられたのだろう。
だから同じ部屋に案内しても、間違ってはいなかったかもしれない。
い。

けれど最も大きな間違いが御座いました……それは俺が男の子だ
ったのです！ 決して男の娘では無いよ、男の子だよ。見た目は兎
も角、精神は真っ当な男だから。
てな事があって、俺たちは別々の部屋に案内して貰った。

……別に惜しかったなんて、考えちゃいないよ？

閑話休題

「……そうか」

「はい。それでは失礼致します」

俺に頭を下げると、セイナーレは部屋から立ち去った。そう云えば俺は、昨日の朝から何も食べていないのだった……。色々ありすぎて忘れていたが、思い出すと腹が空腹を訴えだした。

——クツ！ 鎮まれ……。俺のお腹よ、鎮まりたまえ……。
って、アシ○カがタタリガミを抑えるかの如く、物まねをしても仕方が無いので、早く準備をしてから、向かう事にしよう。

俺はふと椅子が目に入り、その上に置いていた、俺が日本から持ち込んだ鞆に眼を向けた。

此処の連中は、俺達から荷物を取り上げるような事はしなかった。

いきなり《隷属の魔術》をかけてくる様な連中なのに、甘いと思う部分が多々あった。

まあ、それはそれでありがたいので、態々墓穴を掘る様な事を、云う心算も無いのだが。

立ち上がり鞆の中身を確認した。

教科書、ノート、筆記用具（ボールペン×2、シャープペン×3、消しゴム、蛍光ペン黄&赤、黒マジック）、ハンカチ、ティッシュ、携帯電話、手動充電器（LEDライト付き）、MP3プレーヤー、ペットボトル、飴10個、ガム4枚。

その他の持ち物には、腕時計と財布に制服位か……。

ここの文明レベルはまだわからないが、まともな照明器具が存在

してない事を考えると、俺の持っている物は、かなり武器になるかもしれない。

……しかし鞆にお菓子とか入ってるし、何しに学校に行ってたんだろうな。

ふと気になり、俺は時計の時間を確認してみた。

——A M 0 6 : 3 0——

窓の外を見てみたが、見た感じだけど、時計に表示されている時間と大差ないようだった。

異世界の筈なのに、太陽が二つもあるのに、日照時間が地球と大差無いのが、不思議でしようがなかったが、それは今考えても仕方が無いので、頭の隅に追いやった。

鞆の中身を仕舞い直すと、元の場所に置きなおした。

現状着替えとかも持っていないので、このまま出て行くことにした。

風呂にも入っていないので、体臭が少し気にはなったが、諦める事にした。

俺は扉に手を掛け部屋を後にすると、通路に居た侍女に声を掛けた。

「……すまんが、食堂まで案内して貰えるだろうか？」

俺の呼びかけに気付き、侍女の娘は振り向き俺を目視すると、驚いた顔をした。

ショートヘアの活発そうな、綺麗よりは可愛いと表現する様な少女だった。

——この世界は、容姿のレベルが高いのだろうか？

それとも単純に、雇っている人間がそう選んでいるのだろうか？

……後者の方が可能性が高そうだな。

「——は、はい！　かしこまりました！　ゆうしゃしゃみゃ」

……おいおい、嚙んでる嚙んでる。侍女の少女はもの凄くテンパっていた。

セイナーレはこの侍女に、話を通していたのではなかったのか……。

まあいいか、案内してくれるって言うのなら、なんでもいいさ。

「で、ではこちらになります。私に付いて来てくだひゃい」

立ち直したと思ったら、結局また嚙んだ。面白い子だななんて、チヨット失礼な事も考えながらも、俺は彼女に食堂まで案内してもらった。

第二話 ……俺は戦いに向いてません

とりあえず、今わかっていることを話そうと思う。

——まず、俺達を今すぐ一般市民に、勇者として公表する心算は無いようだ。

そして、このプレクスタ城に居る人間でも、俺達の事を知っている人間は限られていた。

この国の王族や宰相など上役の人間、そして一部の兵士や侍女達、これには、俺達の世話役という意味合いも、含まれているのである。

だから俺達は現在、城の中でも奥の方に（詳しい城の内部構造はわからないが）、隔離されている状態である。

それは元々、そう云う予定だったのか、もしくは、召喚されたばかりの俺達が、勇者と呼ばれては居るが、どう見たって二人とも強そうには見えない。

故に俺達が戦えるか如何かを、これは見極める期間なんだろう。

勇者として大々的に公表して、実は大した事ありませんでした。

……何て事があつては、国の威信に関わってしまう。

——しかし、今の俺達には好都合だった。

勇者として顔が売れてしまった後では、動きにくくなってしまふ。今の内に、逃げる為にも情報収集や、自分の力をつけておく必要がある。

——そして、なにより分かった事がある。

……俺は戦いに向いてません。

「——ウヒャッ！」

俺は体を格好も気にせず、木剣の横薙ぎを必死でしゃがみかわした。

今の俺は、訓練と称された苛めの真つ最中なのだ。

見つとも無くとも、斬撃をかわすので精一杯だった。

木剣とはいえ、当たれば骨折は免れないだろう。何より痛いのが嫌だもん。

勇者召喚での補正……と言っても、俺の場合は日本に居た頃より、若干身体能力が上がった程度だ。

ぶっちゃけ今の俺の身体能力は、日本で同じ位の奴を探しても、結構見つかるかも知れない。

——そんな俺が、まともに戦って勝てるわけが無いだろう。

俺の相手は、ここ『神光国家プレクスタ』に所属する、『ランカ

スタ騎士団』の副団長様だ。

俺には、力、技術、経験、優雅さ、そして何よりも速さが足りない！

……いやさ、戦闘経験がまともに無い相手なんだから、手加減してくれてもいいだろ。

俺には嘗て、武道の経験があるなんて、裏設定なぞございませんですよ。

「勇者たるものが、その様にみつともなくかわしてどうする！」

「いやいやいや、無理無理無理」

そりゃあ傍から見たら、見つとも無いし、格好悪いだろう。

だが！ 痛いのに比べたら遙かにまつしだから！ だから、そんな事を俺は気にしない！？

「——ハッ！」

左上から右下に袈裟懸けに斬りかかれ、俺は無我夢中で木剣で受け止めた。

しかし受け止めた所を、素早く切り返され薙ぎ払われた。

俺は対処しきれず、持っていた木剣を弾き飛ばされ、木剣を咽元に突きつけられた。

「——ま、参った」

「勇者と訊いて、どんな者かと期待していたのだが、この程度か……」

俺を侮蔑の眼差しで見下げられた。

周囲で見ている人間達も、侮蔑、嘲笑、呆れ、等様々だった。好意的な視線なぞ全く無かった。

まあいいさ、弱いつて云うのは事実だし。俺自身怪我も無いのだから。

——そうっ！ 痛いので、だいつ嫌いだし。

「遙くん！ 大丈夫ですか？」

雪緒は心配して俺に駆け寄って来た。

「ああ……怪我とかは無いから大丈夫」

「そうですか……良かった」

俺の返事に安心したのか、ホッとした表情をしていた。
そしてキツと俺の相手をしていた、副団長を睨み付けた。

……良い娘だな、雪緒は。

「……あれが、騎士の言う科白ですか。」

「次の相手は貴女ですよ」

「はい。わかりました……遙くん、仇はとりますから」

雪緒は俺にボソッと呟くと、俺が弾き飛ばされた木剣を拾い上げ、正眼に構えた。

俺と違い、様に成っているのを見るに、雪緒は剣道か何かの経験

者なのだろうか？

「なるほど、貴女だったら少しは楽しめそうだ……では、行くぞ！」

「はい。いつでも構いません」

副団長は、雪緒の返答を訊くと。駆け出し一気に木剣を振り下ろした。

しかし、雪緒は難無く斬撃をかわしたのだった。

「なっ！？」

副団長は驚いているようだった。それだけ渾身の一撃だったのだろう。

周囲で見ていた人も、さっきの一撃で終わるものだと、思っていたみたいで、口を開けたまま呆けている人も居た。

「貴方の攻撃は、遥くんとのやり取りを見させて頂き、憶えましたが」

「何を莫迦な事を！」

副団長は直ぐに立て直して、体を捻りながら横に薙いだ。

雪緒はそれも難無く、バックステップでかわしたのだ。

「無駄です。貴方の攻撃では、あたしには届きません」

その後も悉く、雪緒は副団長の攻撃をかわし続けていていた。かわし続けているだけで、全く反撃もしないのだ。只ひたすら見切りかわしている。

自分の攻撃が全く掠りもし無い事に、何より手加減されている事に、副団長は次第に、顔を真っ赤にしながらは殺気奔り始めた。

「——クソッ！」

頭に血が上っているのか、自棄糞なのか真っ直ぐ刺突をかました。だが雪緒はその行動を読んでいたかの如く、寧ろ単調だったのであろうか、木剣を絡ませ、切り上げ、弾き飛ばした。

「どうです、まだやりますか？」

「クッ……いや、参った」

「そうですね、副団長様と言っても、たいした事無いのですね」

「——グッ！」

さっきの意趣返しだろうか、雪緒に言われ副団長は、顔を真っ赤にしながらも押し黙った。

俺が全く相手にならなかった相手に、雪緒は問題無く、いや相手にならないほど、圧勝したのだ。

周囲からは雪緒には羨望、尊敬など好意的な視線が集められていた。

俺とは違う反応……良いけどさ、良いんだけどさあ……。

「——面白い、私もやらせて貰っても構わないかな？」

俺達の背後から声がかかり。振り返って見るとそこには、騎士団長様が居られるとな。

「その君、私も相手をして貰ってもよいか？」

「……わたしですか？」

「ああ、そうだ」

雪緒は少し逡巡してはいたが、返答した。

「はい、構いません」

「そうか、有り難う」

雪緒と騎士団長は、訓練場の真ん中に立ち構えた。

「では、参ります」

「ああ」

お互い答え合わせると、勝負は一瞬にして決まった。

雪緒は体がブレ始め一瞬にして消えた。雪緒の特性――アビリティ《高速移動》が発動したのだ。

騎士団長は反応する事すら儘ならず、目の前に木剣を突きつけられていたのだった

「なるほど、わたしたちが異世界イタに呼ばれた理由が良く分かりました。これでは確かに縊るしかないですね」

雪緒の科白はとても辛辣だった。怒ってもいるのだろうか。

さつき迄周囲の好意的だった視線も、科白を訊き敵意を持った視線へと変わっていた。

ただ、何も言っていないのは、何も言えないのは、雪緒の強さを目の当たりにして、恐れているからだろう。

「遙くん、もうここに居ても仕方ありません。お部屋に戻りましょう」

「あ……ああ」

「では、わたしたちは失礼致します」

雪緒はそう周囲に告げると、一瞥もせずに訓練場から立ち去ったのだ。

……雪緒さんちょっと怖いです。

俺は怒らせないようにしないと、心に決めた……。

第三話 ……「ごめんなさい！ 聞いていませんでした！」

訓練でもわかった事だが、身体能力が雪緒と俺とではかなり違った。

具体的に言うと、100M走るのに俺だと11秒かかるが、雪緒だと3秒かからない。

さらに言えば《高速移動》を使用したら、1秒もかからなくなつた。

同じ召喚者なのに、ここまで違うのかと暫く落ち込んだが、どうしようもないから。

……諦めた！ そう、無い物は考えない！ 後ろ向きの前向きに考えていこう！

できる事から考えていく方が建設的だろうから。

……というわけで、俺達は今、魔術の講義の真つ最中でした。

「——と言う訳です。何かご質問は？」

「……………」

……「ごめんなさい！ 聞いていませんでした！ テヘッ。何て言える筈も無く、無言の肯定。」

雪緒の方を横目で伺って見ると、俺と違い真面目に訊いていた様だ。

いやだってさ、長々と魔術の歴史を語られても、興味なんか無い

んだもん。

それよりは、魔術の使い方を早く教えて欲しいんだが。

「つまり、魔術とは神々や精霊に力をお借りした物なのです。

故に、祝福を受けた神や精霊の力だけしか使用が出来ません。

さらに、祝福を受けられますのは、一人一柱だけと成ります。

そして魔術におけます詠唱とは、力をお借りする為の簡易儀式にあたります」

条件が多いな。

「……つまりは魔術師一人に付き一種類、もしくは一属性しか使用できないって事？」

「はいその通りです。魔術師にとって祝福を受ける相手は、今後の人生を左右するものです。

そして必ずしも、望んだ方の祝福を受けれるとも限りません」

なるほど——魔術って云うのは借り物って事か。

神などと契約して、契約した人間にだけ力を貸すって事ですかな。

「稀に産まれた時点で祝福を受けた方も下りますが、基本は祝福を受けないと、魔術を行使することは叶いません」

「では、あたし達も祝福を受けるんでしょうか？」

「いえ、例外も存在します。まずは魔方阵を使用されました物です。魔方阵には一種類の効果しか、意味を持たせる事しか出来ませんが、祝福を受けずとも使用が可能です。」

ただそれでも、魔術師以外には行使は不可能ですが……。

そしてもう一つの例外が勇者様方なのです」

「……どういう事ですか？」

「はい。勇者様方は、異世界^{イジヨウ}でお産まれになられた存在では御座い
ません。

ですので存在の立ち位置が、神々や精霊等の存在に近しいのです。
なので祝福も受けずとも、魔術を行使する事が可能な筈だと思います」

ふむ——勇者の次は神様ねえ？

「だったら自分の力を現象として具現化するのが、勇者にとっての
魔術なのか？」

「いいえ、違います。近しい存在だと云いましたが、それ故に祝福
を受けずとも、その他の神々や精霊から、力を借りる事が可能とな
るのです。

しかし勇者様でも、全ての方から力をお借りできる訳でもありま
せん」

たしかにこの世界の人間から見たら、勇者って云うのは十分チ
ートだが、それでもそこまでは便利ではないのか。

「そして魔術を行使する上で必ず、魔力^{オド}が必要となります。
神々等に力をお借りするので。その際に魔力^{オド}を媒体として捧げま
す。

祝福を受けます以前の問題として、魔力^{オド}を持たない人は、魔術を
行使することが不可能です。またお借りする力が強ければ強いほど、
必要となる魔力^{オド}も多くなり、更に詠唱時間も膨大と化していきます」

なるほど、MPを持たない人間は、最初っから魔術なんか使えないって事か。

ゲームの戦士や武道家が魔法を使えないみたいなものかな。

しかし話を訊くだけだが、とても戦闘に活用できそうも無さそうなんだが。

「そして大気中には魔力^{マナ}も存在しますが、これに関しましては、普通には見る事も、感じる事も出来ません。

ですので魔方阵や魔道具など、魔力^{マナ}を扱う為には外部媒体を必要とします。

そしてそれを発動する為の切っ掛けとしても、魔力^{オド}が必要となるのです。

故に魔術師以外には、魔術を扱う事は叶いません」

本当に条件が多すぎるだろ。にしても文明レベルも元の世界には遠く及ばないし、魔術すら、自由に扱えないのだとしたら、不便な世界だな。

「なあ、魔術師ってのは、この国だけでも何人くらい居るんだ？」

「城に所属されてます人間だけで、約30人程となっております。この国全体で見ても、大体100人居るかどうかだと思います」

MPが必要で更に祝福を受けなければ、使う事が出来ない。

条件が厳しい癖に、そこまで便利って訳では無いのだったら、その位居れば上出来か。

「私が祝福を受けておりますのは、《炎神ファルネイア》と云いま

す。

炎神の名の通り、私の魔術は火を操る物になります。
そして、この神は火属性を操る者にとっては、最もポピュラーな神なのです。

ですので恐らく勇者様方も、扱えると思いますので、今から魔術を実際に使ってみますので、真似をしてみてください」

おお！いよいよか……ヤバイ！　ワクワクしてきたぜ！　なんせ魔術だぜ、魔術。幼い頃にかめ〇め波と一緒に、一度は誰だって真似をした事があるもんだよな。

それが実際に使えるって、浪漫溢れるよな。

こっちに飛ばされた時に、《隷属の魔術》をかけられたけど、あんなもの邪道だよ邪道、魔術って云うのならやっぱり、炎か風だよな。

講師役の魔術師が、右手をスツと差し出すと、俺は掌に魔力オトが集まるのを感じた。

そして何かを喋っている、恐らく先程説明していた詠唱だろう。

「炎よ、火球となりて吾が手に集え『ファイアボール』」

ボウッ！

……ピンポン玉程の大きさの火の玉が浮かんでいた。

……ええっ！　ちよっ……シヨボッ！　俺の浪漫を返してくれ！
ってまあ、さっき言っていた、詠唱時間や魔力量の都合なんだろう

うな。

「では同じように試してみてください」

「ああ」「はい」

俺と雪緒は返答すると、真似をする様に右手を前に差し出した。

——ええっと、それからどうだったっけ？ 右手に魔力^{オト}を集めていたよな？

思い出しながら俺は右手に集中し、魔力^{オト}を集めだした。前に《魔術感知》をやって以来、魔力^{オト}を感じ取るのは、さほど苦にならなかったので簡単に出来た。

後は詠唱だったな……先程言っていた科白を思い出し、炎を想像しながら、唱えてみた。

「炎よ、火球となりて吾が手に集え『ファイアボール』」

ボウッ！！

俺の掌に火の玉が現れた……って、うわぁ、俺もこんなもんか……。

ちょっと期待していただけに、あまり変わらなかった事実にかッカリしていると、講師役の魔術師が、驚いた表情を浮かべていた。

「そ……それは、蒼炎では……」

んん？ 蒼炎？ 何それ？ と思いながら、再度俺の火の玉を確認すると、先程の魔術師が出した火の玉より、蒼かった……という
か真っ蒼だった。

「なんだ、これ？」

俺は不思議に思い、魔術師に尋ねてみた。

「それは蒼炎と言いまして、《炎神ファルネイア》からお借りできる。

最強の炎と呼ばれております。私も実際に目にするのは初めてなんです……」

「……へえ」

——魔術師の反応を見るに、かなり凄い事なのだろう。

俺には良く判らなかったが、寧ろもつとド派手なヤツを出したかったんだが。

けれどとりあえず、俺は魔術が祝福を受けずとも、問題無く使える事がわかった。

雪緒を窺ってみると、問題無く赤い火の玉を手に浮かべていた。確かに召喚者つてのは、祝福を受けなくても、魔術が使えるみたいだ。

しかし雪緒は弱点が無いな、接近戦も出来て魔術も使えるって、ちよつと反則過ぎるだろう。

「ちよつと訊きたいんだが、身体能力を強化する魔術って存在するのか？」

「恐らく……ですが、私は見たこと無いのですけど」

在るかも知れないって、わかっただけで十分だ、とてもでは無いが、今の俺では戦力にならないだろうから、もっと勉強しなくては。

せめて彼女の足手纏いに、ならない位にはならないとな。

第四話 — 誰か俺を慰めて!?

あれから俺は一人部屋で魔術の自主練に励んだ。

と言っても流石に、自分の寝室で攻性魔法の練習をする、勇氣は無かったので、主に身体強化等の魔術に、チャレンジしてみた。

講師役の魔術師は存在はするかも知れないとか、言うてはいたので、実際に試してみたんだが、結果は大成功だった。

本来魔術を使う為には、祝福を受けた上で、魔力を捧げつつ詠唱が必要とされては入るが、俺は祝福は必要ない上に、特性アベリテイ《無詠唱》のお蔭で、詠唱が必要なく、魔術をイメージして、魔力を捧げるだけで使えたのだ。

何より《魔術感知》の恩恵で、魔力の認識が出来るのだ、故に俺にとつては魔術制御が、もの凄く簡単だった。

試してわかったが、魔力が眼に見えるって云うのは、本来出来ないような、細かい操作も出来るのだ。

—— 結果、今まで無かった魔術も使えるように成っていた。

具体的に言えば《浮遊移動》レベテーションで、空中に浮く事が（浮いて移動するだけで、空を飛ぶとは程遠い）出来る様になったり、《光学迷彩》インビジブルで文字通り、透明になって、女風呂を覗きに行こうとしたり……。行こうとしただけで、実際には行っていないからね。俺の中の天使と悪魔が、バトってたのは、ここだけの秘密だ。

漫画やゲームで出てきた様なものを、色々試してはみたが、何だかんだで殆どが成功した。

しかし、プレートを見てわかってはいた事だが、俺は魔術に関しては、際限無く反則だった。

全てが全てを試した訳では無いのだが、大概な事は出来るのだろう。

この城の魔術師にコンタクトを取り、さり気なく訊いてみたのだが、その様な魔術自体が存在せず、俺のオリジナルの魔術だったのだ。

この世界の人間は、前提条件として祝福を必要としているので、同じ事が出来る存在は居らず、勇者である雪緒に訊いて色々試してみてもらったが、俺と同じ様に使う事は出来なかった。

魔術は神たちの借り物の筈なのに、俺の力はその枠を超えているのだが、

いくら考えても詮無い事なので、無駄な考えはしない事にした。

そう、寧ろ俺が神様だ！？ あ……いや……ごめんなさい、調子に乗りました。

俺は、自分に強化魔術が使える事で、もしかと思いチャレンジしたら、

こんな物が誕生した。

「うおおおおおおお、○次元ポケットだああああー！」

俺がこの世界に持ち込んだ鞆の中に、ワームホール亜空間を繋げてみました。はい、そうです。かの有名なネコ型ロボットの、○次元ポケットを試してみたら、成功したのだ。

自分を強化出来るのなら、物にも出来るかと思つたら、案外簡単に出来たのです。

作ろうと思えば、何処でもドアも作れるかも知れないな……。

しかし、この異世界に来てから数日経つが、そろそろ城から抜け出して、情報収集を始めるべきだろうか……城の中でもやろうと思えば出来なくは無いが、城の外の状況を把握しておかないと、動き辛い部分も出るかも知れない。

当たり前だがこの国の連中は、俺が《隷属の魔術》がかかっていると思つていても、現状秘匿されている人間が、このまますんなり外に出れる訳が無いだろう。

という訳で早速俺は、自分自身に《インビジブル光学迷彩》をかけた。

この魔術に関して言えば、特性《魔術感知》を持つ俺以外には、認識する事は出来ないみたいだった。

訊いただけだが、只でさえ魔術師と言う存在が少なく、尚の事、俺みたいな特性を持つ人間は居ないのだろう。

などと云う事があり、俺は安心して城から外に出れるのだ。

しかし、いずれは何処でもドアを作り、そこから出入り出来る様にしたいな……。

——という訳で、やって来ました城下街です。

とりあえず、今回は初めて外に出るって事で、雪緒には、お留守番をお願いしといた。

勇者がいきなり二人とも居なくなれば、怪しく思われるだろうし、何より、彼女の《隷属の魔術》が解けていないので、安全の為に、残ってもらったのだ。——いずれは、外に出せる様にはしたいが。

まあ、この問題は今考えても仕方が無いので、置いておく事にして。

早速だけど、街で情報収集を始めるとするか。

……しかしまあ、薄々感じてはいたのだが、この国はかなり大きいみたいだった。

街の外れには防壁があるんだが、裸眼では遠すぎて視認できなかった。

これでも裸眼1.5（召喚者補正で若干上がり2.0）だったんだが、それでも見えなかったのだ。恐らくだが、半径で見積もっても二キロ以上あるのだろうか。

こんな所で、おのぼりさんをしていても仕様が無いので、通りに市が立っていたので、見て回る事にした。

市が立っている場所は、人が溢れてとても賑わっており、人だかりがある、店も何店があった。

売っている物は、食料品から衣料品、雑貨に果ては武具など様々で、予想通りは予想通りだったが、実際に見てみたら圧巻であった。

——わかつてはいた事だが、自分が異世界に居る事を、思い知らしめる光景なのだ。

俺は気を取り直して、近くにあつた食料品を扱ってる店を覗いて見た。

見た事がある物や、見た事の無いもの、様々な野菜や果実が並んでいた。

見た事があると言っても、元の日本で見た事があるって訳では無く、城の中で食事の時に出てきた物なんだが。

値段も様々で、林檎みたいだが青い果実に、30シンと付いていたり、キャベツみたいな物には40シンとなっていた。

このシンってヤツが、この国での通貨単位なのだろうか？

1シンが日本円で、幾らに当たるかは判らないが、憶えておく事にした。

店主のおっさんが俺に気が付いたのか、声を掛けてきた。

「お？ 姉ちゃん、なんかお探しか？」

……ね……姉ちゃんって俺の事ですか？ 周囲を見渡しても、それらしい人が居ないので、あまり考えたくは無いが、俺の事だろう……。

しかしこんな所で、一々言い返しても仕方が無いので、あえて女の振りをする事にした。

「ええ、ここに來たのは初めてなんですけど、いま手持ちが心許なくて、あの……よろしければ、物を売る事の出来ますお店を、私に教えて貰えないでしょうか？」

うおお……自分でやっておきながら、気持ち悪さで吐きそうにな

ったぜ。

「ほお、それは大変だったな……わかった、この先にある道具屋に、ガイルって言うヤツがいる。そいつにデレクの紹介だって言えば、悪い様にはして来ないだろう」

——おお！ ものは試しとやってみるもんだな。

おっさんは見事に、俺に騙されて女だと思ったのだろう、鼻の下を伸ばしながら、俺の問いに答えてくれた。

「そうなんですか！？　ありがとうございます」

……ちよつと身がゾツとしたが、この際目を瞑る事にし。

俺は店から離れると、早速おっさんに紹介された、道具屋に向かった。

市を横切って進んで行くと、先程紹介された道具屋らしき店を見つけ、中に入って行った。

店の中には魔物の腕らしき物や毛皮、または青銅の鏡など、様々な物が商品として、所狭しと陳列されていた。

「はい、何をお求めでしょうか？」

店の奥から、店主らしき人が顔を出し、俺に声を掛けてきた。
コイツがそうだろうか？

「あの……ここにガイルさんって居られるでしょうか？」

ここでも俺は、女の振りをする事にした、効果は先程実証されているので、恐らくここでも有効かもしれない……。

ただ最大の欠点としては、俺の自尊心が、ガリガリ削られてしま
う事だろう。

ああ——誰か俺を慰めて！？

「うん？ ガイルは俺だが？」

「あ……そうだったんですか、失礼しました。私はデレクさんに、
紹介されて来たのですが」

「んん？ デレクにか？ と言ったご用件かな」

「はい、物をお売りたいのですが、デレクさんには、ここに来て
ば良いと、教えていただいたのですが」

「ああ……売りね。それでどんな物を売って貰えるのかな？」

俺は、いままで肩に提げていた鞆を取り出した。そう、これは、
例の○次元鞆である。中には、この世界に持ち込んだ荷物を入れて
ある。

中から黒マジックを取り出した。日本でも最も有名であろうマジッ
ク○です。

「あの……これなんですけど……」

気弱な振りをしながら、差し出した。

「なんだいこれ？」

店主は訝しがりながら、俺の手に持っているマッ〇ーを眺めた。

「はい、これは文字を書く道具でして……」

俺はお手本としてキャップを外し、掌に文字を書いてみた。

この世界では当たり前だが、ボールペンやシャープペン等は存在しなかった。

尚の事、〇ツキーなぞ存在せず。

万年筆とインクを使い、紙も木の繊維で出来た物は無く、羊皮紙などである。

それを考慮すれば、俺の持っている文房具は、それなりの値段で売れるのではと、考えたのだが……。

「ほう………どういう仕組みになっているんだい？」

「私も詳しくは………ただ中にインクを溜めておく仕様だったと」

ぶっちゃけ、詳しく説明しようと思えば出来なくは無いが、売る前にバラしても、こちらにはいい事など無いのだから、濁した表現にしておく事にした。

「ふむ———そうだな、デレクの紹介と言う事だし、3000シンでどうだい？」

3000シンか………貨幣価値がわからないから、判断が辛い。
なにかここに、参考になる物はないかなと、周囲を見渡してみたら、ありました………訓練で度々お世話になっております。………そう薬草

だった。

「……………これは」

俺は薬草らしき物を指さし、訊いてみた。

「ん？……………薬草がどうかしたのかい？」

ふう——やっぱり薬草で合っていたみたいだ。

「これってお幾らなんですか？」

「薬草が欲しいのかい？　一つ100シンになるけど」

——よっしゃ！　情報ゲット！　薬草一個が100シンだとすれば、日本円で言えば千円位か？　幾らなんでも、消耗品が一万円つて事は無いだろ、だとすれば一シンが十円位で、3000シンだと3万円位だろうか…………？

まあいい、今は一文無し何だから、ある程度は勉強だと割り切っておく事にした。「いえ、少し気になりましたもので……………あと、そのお値段でお願いします」

「お……………そうかい？　まいどあり」

俺の問いには、さほど気にはならなかったみたいで、店主は店の奥に戻り、代金を取り出すと、すんなり俺に渡して来た。

「ほらよ、3000シン」

「あ……………どうも」

俺は30枚の銀貨を受け取った。銀貨が30枚って事は、これ銀貨一枚が100シンって事だろう。

「——お尋ねしたいんですけど、こちらのお店には、魔道具って置いてありますか？」

店主は俺の質問に、少々驚きながらも答えてくれた。

「おや？ 魔道具をお探しだったのかい、残念だけど店では扱ってないな。知ってるかも知れないけど、魔道具ってのはもの凄く稀少で、この国でも、取り扱ってる店は無いかも知れない……。あと失礼ながら、先程売った3000シンでは、とてもでは無いけど、最もランクが低い物でも買えないと思うよ」

「え……そうなんですか？」

「うん、そうだね、最も低いランクの物でも10000000シンは必要だね」

——ひゃ、ひゃくまんん！？ に、日本円に直すと一千万円かよ……。

しかも最も安い物がだと……とてもではないが、手が出る物では無いな。

魔道具で、俺の戦力底上げを考えていたんだが仕方が無い、何処か武器が手に入る場所を、訊いてみる事にするか。

「でしたら、どこか武器屋さんを教えて頂けないでしょうか？」

「武器かい？ うーん、そうだね、だったらこの通りを真っ直ぐ行った所に、大きくは無いが、品揃えだけは良い所があるから、そこ

に行つてごらん」

「あ……本当ですか？　ありがとうございます」

「構わない」

俺が丁寧にお辞儀をし、お礼を言つと店主は少々デレた顔をしていた。

……案の定、俺の演技に騙されていたみたいでした。フッ……他愛も無い。

だがしかーし！　俺の自尊心にも、多大なダメージを受けてしまった！

嗚呼……無常……。

「いらつしゃい！」

道具屋の店主に教えて貰つた武器屋に入ると、二十歳半ば位のお姉さんに迎えられた。

「なにをお探しかな？」

「ええ……」

俺は曖昧な返事をして、店内を見回した。店舗としてはさして大きくは無いが、所狭しと、いやギョウギョウに様々な武器が置かれていた。

……確かに品揃えだけは良い様だ。

「あの、お……いえ、私でも使えそうな武器って無いでしょうか？」

俺って言いそうになった、危ない所だったぜ。

って、あ……相手がお姉さんなら、この作戦意味無いじゃないか！？

しかし今更、言い直せる訳も無く、このまま通すしかないのか……。

「うん、そうだねー、手を見せて貰ってもいいかな？」

「手……ですか？」

「うん、そう、手をね」

俺はお姉さんに言われた通り、手を差し出した。お姉さんは出された手を調べていく、手のひらを触ったあと、確認するように腕も触っていった。

「うーん、そうだなー、筋力がそこまで高くないと思うから、なるべく軽い物がいいんだろうなー。」

やっぱり剣がいいのかな？」

「いえ、特にはこだわりは無いんですけど……」

「そっかー、だったらこれぐらいかな」

お姉さんは奥からナイフとフレイルを持って出てきた。

「ご要望の中で、貴女に合いそうなのはこんな感じかな、見たところ初心者さんみたいだし、値段もこの位がいいと思うな」

「あれ？ 私言いましたっけ？」

「ううん、それでもそれなりにやって来ているからね、手だって綺麗な物だし、経験者に比べたらってことだけど、あーそうだ、予算も教えてもらえるかな？」

その範囲でまだ、いい物があるかもしれない」

予算か……今後の事を考えると、ある程度手持ちを残しておいた方が良いか、だとすれば、2000シン位にしておけば良いか。

「ええっと、2000シン位を考えていたんですけど……」

「2000シン？ そうなんだ……3000シン程あれば、特性武器が出せたんだけどなー」

「特性武器？ なんですかそれ」

「んー、特性武器って言うのはね、魔術師じゃなくても、それに近い力ができるってシロモノだよ。今回で言えば火だねー、と言っても焚き火程の火力も出ないんだけど」

んん？ 特性武器って云うか属性武器ですな。しかし魔道具とどう違うんだ？

自分で考えただけでは詮無いので、訊く事にした。

「それって、魔道具とどう違うんですか？」

「魔道具って！？ そりゃあ天と地ほど違うよ。まず魔道具は、魔術師にしか使えないけど、特性武器は誰だって使える事。

そして何より威力が違いすぎるよ。特性武器では、どんなに良い物でも、火を熾す程度にしか使えないから」

劣化版の魔剣みたいなもんか、まあ、特性武器は、日本円で三万位で買えるのに、魔道具は最低でも一千万以上するってだけでも、かなりの差があるんだろうな。

「そうなんですか？ …… やっぱ、そちらのナイフ頂けますでしょうか」

反則に近い魔術が使える俺が、欲しがる様なシロモノでは無いので、普通のナイフを購入する事にした。

「そお？ まいどありがとう」

俺は代金として1500シン支払った。…… 一万五千円のナイフか……。

日本で考えれば、かなり良いシロモノになるだろうな。

「はい、おつり。それとこれは、初心者さんにサービスしといたから」

お姉さんは、バンド付きのケースに入ったナイフを渡して来た。このケースがサービスって事だろう。

「あ、ありがとうございます」

「いいのよ。それよりも今後も店を利用^{うち}してね」

俺は購入したナイフを鞆に仕舞うと、お礼を言って店を出て行った。

暫く通りを歩いていると、冒険者ギルドと看板を立てている、建物を見つけた。

——そういえば、自分の能力を見るためのプレートは、ギルドで使われている物だって、言っていたよな……。

俺は不意に、侍女長の科白^{セイナレ}を思い出し、興味本意で覗いて行く事にした。

中に入ると視線が俺に集まって来た。少々気にはなったが、それにあえて、気が付いていない様な振りをして、受付カウンターに向かった。

暫くすると興味を失ったのか、俺に向けられていた視線が、殆ど無くなっていた。

「冒険者ギルドへようこそ。どういったご用件でしょう」

受付のお姉さんは、俺に声を掛けニツコリ微笑んだ。

「聞きたいんだが、ギルドって云うのは、ここだけなのか？」

「およ？　ここに来るのは初めてかな？　では説明いたしましょう。
この国には複数のギルドが存在して、ここ冒険者ギルドは、主に冒険者に討伐や探索依頼など、仕事を受注したりする場所で、他には商人ギルド、巡礼者ギルド、鍛冶師ギルド等あるんだけど、他に關して云えば、実際見に行つて貰った方が、私が説明するよりは、わかりやすいかも知れないな。」

受付のお姉さんはノリノリで、俺の質問に答えてくれた。

ふむ——ギルドは一つではないのか……。

「そのギルドって掛け持ちも出来るのか？」

「ああ、そこ言い忘れていたね。ギルドって言うのは、基本的に一つしか加入が出来ないの。だから、加入条件としては、他のギルドに加入していない事なんだよ。」

もし他のギルドに加入したくなっても、まず前のギルドを止めた上で、三ヶ月以上経過していないと、加入出来ないんだよ」

なるほど——意外と縛りが多いな……今日は情報収集目的で来たので、

今すぐ判断するのは早計だろう……という事で、今回は加入を見合わせた方が良いか。

「そうか——ありがとう、ちょっと考えさせてもらおうよ」

「そお？ うん、ゆっくり考えればいいよ」

俺は受付のお姉さんにお礼を言うと、冒険者ギルドを後にした。

今日はもう城に戻るとするか……今回は初めての城外だし、長時間不在にする事もマズイだろうから。

酒場によって情報収集もしたが、次回に回すことにしよう。

嗚呼然し、何処でもドアが欲しいな……。

第五話 ふー、いい仕事をした。

初めてのお出かけから、帰ってくると、早速何処でもドア作りに取り掛かった。

試行錯誤を繰り返しながら、結果——成功した！

「じゃじゃじゃじゃ、じゃーん！ 何処でもドア」

大山ドラえ○んの如く、お決まりの科白を言ってみた。

あ？ ……俺はどつちかと言えば大山派だから。

だからこの際、のぶえもんって呼ぶことにしよう。

余りの嬉しさにテンションが有頂天だ。

イヤッホー！ しかしまあ、やれば出来るもんだな。

幼い頃もよく言われたもんだ、やれば出来る子だって……あれ？
これは違ったっけ？

と言っても、本家程の万能性は無いのだけど。

具体的に言うと、流石に次元跳躍無理だから、俺が知っている空間同士を繋げると云うことで、その為一度行った事がある場所にしか、行くことが出来ないと云う縛りがあるんだが。

——まあ本家程の万能性があるんだったら、元の世界に簡単に帰れるんだろっしな。

しかし、このピンク色のフォルム、のぶえもんの秘密道具の中で、欲しいものベスト3に入るだろう、俺は達成感に溢れていた。

「ふー、いい仕事をした」

かいてもいない額の汗を拭う様にしながら、ドアを眺めていると、背後から扉を叩く音がした。

「遙くん、いますか？」

この世界で、俺の名前を呼ぶのは一人しか居ないので、誰が来たのかは直ぐにわかった。

「——ああ！ いるよ、開いているから入っておいで」

俺の声が聞こえたのか、雪緒が入ってきた。

そして俺の前にある物に気が付いて……呆氣にとられて固まった。

「は、遙くん……それになかな？」

ああ、そういえば、雪緒にこれを見せたのは初めてだったな。

「んー、何処でもドアだよ」

「……はい？」

「だから、何処でもドアだよ、何処でもドア……雪緒は知らない？」

「いえ……知っていますよ。ただ私の知っている物は、青い猫さんの持ち物だったような……」

「うん、雪緒が言っている物で、間違い無いと思うよ。ただこれは俺が自作した物なんだけどね」

「……遙くんの魔術は、色々出来るとは伺ってましたけど、こんな

「ことも出来たんですね」

雪緒は俺の言葉に納得したのか、ドアをペタペタと触って、確認していた。

「何処でもって言っても、そこまで便利な物では無いんだけどね」

「そうなんですか？」

「うん、俺が作ったのは、一度行って記憶した場所にしか、行く事が出来ないんだ。」

のぶえもんが使ってた物には程遠いけどね」

「そうですか……それでも、便利な物には変わりないですよ」

「そっか……うん、ありがとう」

「——い、いえ」

俺は作った物が褒められたので、お礼を言うと、雪緒は耳を赤くしながらも声を返した。

「……それで、のぶえもんでなんですか？」

あれー？ 今、そこをつっこむの？

「ええっと……大山ド○えもんだから、のぶえもん……」

いやあああああああ、お願いだから！ 俺にそんな事を説明させないで、恥ずかしい……。

「あ……ああ、なるほど」

雪緒は俺の説明に納得いったのか、頻りに頷いている。

俺は自分がさらつと言った科白に、果てなく後悔していた。

このままではいけないと思い、恥ずかしさを押し殺しながらも、雪緒に訊ねた。

「それで、何か用事だったのかな？」

「いえ、特に用事があるわけでは……」

雪緒は何だかんだで、俺と一緒に行動する事が多かった。

ここにいる誰よりも強いのだろつが、彼女の立場や容姿目的で、擦り寄る者があるろつが、雪緒にとってはこの世界は孤独なのだろつ。この先についての恐怖もあるだろつ。

その中で、同じ出身地、同じ境遇、そして同じ立場——彼女の唯一の例外が、俺なんだろつ……。

だから、時間があれば頻繁に俺の所に来ていた。

「……そっか」

「用事がなかったらダメでしょうか……？」

雪緒は上目づかいで、俺を見詰めてきた——うおおおお！めちゃカワエエ！止める！そんな目で見るな！惚れてまうやろ！！

「いやいや！そんな事無いよ、そんな事無い！」

「そうですか……よかった……」

俺は慌てて答えた、それを訊いて安心したのか、雪緒は深く息を吐いていた。

だからその一々可愛い行動を止めてくれ。

「あ！——だったら、俺が調べてわかった事を教えようかと思う」

「わかったことですか？」

「うん、そう、わかった事」

俺は魔術を駆使して、色々暗躍していたのだ。

具体的に言えば、書庫に潜入したり、騎士や兵士、侍女や魔術師共の会話を盗み聞きたり。

またはこの国の有力貴族の情報収集等 e t c、そして女風呂にせんにゅ……あ、これは嘘ですよ？

書庫に潜入した際には、入り口に魔術で封印されていたけど、俺の魔術抵抗^{レジスト}力持ってすれば、ドアノブを握っただけでぶっ壊れまして。

もちろん俺が、魔術を掛けなおしましたけどね。俺以外は入れないように。

この世界の常識のお蔭で、俺がそんな事出来るなんて知っているのは、雪緒以外居ないから、大丈夫だろう……。

書庫にあつた蔵書のお蔭で、色々わかった。魔術の事や勇者について的事——調べて、わかったって言うか、わからなかった事だが、俺の職業《愚者》や、俺の魔術については書かれていなかった。

本当何なんでしょうね俺？

——ともかく、勇者についての事は、雪緒にも伝えた方が良いでしょう。

「この世界に召喚された、過去の勇者について、ある程度わかったから伝えようと思って。」

「えっ！ 本当ですか！？」

「うん……過去、一番新しいものでも、二百年以上前になるんだねどね。」

勇者が召喚されたい、ここら辺は俺達と一緒にだね」

「……はい」

「で、細かい事は割愛させて貰うけど、その勇者は仲間と共に魔王を封印したらしい」

ここまででは、よくありふれたお話だね。

「そのあと、勇者はどうなったんですか？」

「うん、そこが気になるよね——その後、その勇者はこの世界で結婚して、そのまま生涯を終えたいらしい。

少なくとも、俺が見た書物に書かれている勇者は、全員この世界で死んだ事になっている」

「——そんな！ じゃあやっぱり……」

「この城の連中は、俺達を帰す心算が無いのだろう……。
いや——違うか、帰す心算が、では無く、帰す方法が無いのかも
知れないな」

「……………」

「少なくともこの事を、この国の連中は知っている。知った上で俺
達を呼んだ……。」

呼ぶ事は出来ても、帰れない一方通行……まるで、かごめかごめ
みたいだな」

俺は吐き捨てる様に言葉を紡いだ。

「……だったら、わたしたちはもう、帰ることが出来ないんですか
？」

かぼそい声だった……。俺は息を深く吸い込み、雪緒に語るよう
に訊かせた。

「いや、俺はまだ諦める心算はないよ。雪緒も知ってるけど俺の
魔術は、この世界でも反則級チートなんだ。もしかしたら、何かしらの方
法があるかもしれない」

嘘をついてしまった……。俺は帰れないんだろうなと、薄々感じ
ていたのだが。

気休めとはいえ、流石に雪緒に嘘を言うのは、良心がズキズキと
痛む。

「そ……そうですね、まだ諦めるには早いでもんね」

雪緒は胸の前で、小さくガツポーズをとりながら言った。
俺はその可愛い行動に、癒されながらも答えた。

「ああ……そうだ。その為にも雪緒を解放して、この国から抜け出そう」

嗚呼、そうだ。この国の連中の為に、働いてなんかやるものか。
早く雪緒を解放する方法を見つけよう。

第六話 様式美って大事だよね？

俺は、雪緒の魔術を解くため、城内、城外問わず情報収集をしていた。

何処でもドアが完成したので、外に出入りするのかなり楽になったし。

○次元鞆のお蔭で隠すのも然程苦ではないので、大変便利であった。

—— まったくのぶえもんは凄いいぜ！

そして、持ち込んだ筆記用具の類は、大半を売り捌いたら所持金が15000シンになりました。

凄いいよな、日本では全部買っても千円いかないのに、こっちの世界では十倍以上になるんだから。

それでそろそろ、実戦を戦闘を経験するべきだろうと思い始めた。訓練自体は続けてはいるが、雪緒の前以外では基本的に力を隠しているの、殆ど訓練が訓練になっていなかった。

最初の魔術講習の時に、誤って蒼炎なんて使ってはしまったが、それ以来俺は、それしか出来ない振りをしている。

雪緒に関して言えば、初めに怒って本気を出してしまったので、今更感があるので、普通に訓練に取り組んでいるのだが……。

—— 故に俺は、この国の連中には大した事の無い、落ち零れの方の勇者と云う認識になっている。

まあそれは望んでやった事なので、何の問題も無いのだけど……。

という訳で、冒険者ギルドに登録して、討伐クエストでも受けようかと思っている。

では、早速出よう。

「何処でもドア」

例の科白を言い、鞆からドアを取り出した。

——そこ！ サイズ的に取り出せるのは可笑しいと言わない！
そこはファンタジーだって事で納得するべき所だから！

雪緒も連れて行けたら良かったのだが、例の魔術に、任意追跡効果があるらしいので、外に出せないのだ。

あつと、いう間に冒険者ギルドに到着しました。
所要時間にして五分もかかっていない。
便利だぜ！ 何処でもドア！

早速だけど登録に向かうか……。

「冒険者ギルドへようこそ。どういったご用件でしょうか？」

「登録をお願いしたいのだけど」

「はいはい、あ……君は！」

受付のお姉さんは、俺の顔を見て少し驚いていた。
気になり俺が訊ねてみると。

「君は前に来た子だよね？」

この前来た時と同じお姉さんだったのだ。
あの時は、然程気にしてなかったので、俺はすっかり顔を忘れていた。

気が付かなかった事を誤魔化すように、受付のお姉さんに答えた。

「——ええ、よく憶えてましたね。ここに来る人って少くないでしょう？」

「まあね、けど君みたいな綺麗な人って滅多にこないからね」

綺麗って男にかける誉め言葉じゃないぞ。

「そっかー、それでやっぱり登録する事にしたんだ」

「ええ、まあ」

「りょーかい。それで登録するんだけど、ギルドカードって持っているかな？」

俺は、鞆からセイナーレに貰ったプレートを、お姉さんに差し出した。

「ギルドカードって……これでいいんですたっけ？」

「うん、そうだよ。じゃあ預かるね」

やっぱりあのプレートはギルドカードだったのか。
受付のお姉さんにプレートを受け渡した。

「あと登録に１０００シン掛かるんだけど、持つてる？」

１０００シンか……そんな位はやっぱりかかるのか。

俺が銀貨１０枚を渡すと、お姉さんはギルドカードをヘンテコな機械みたいな物に翳した。

すると機械が光だし、カードをスキヤナみたいに読み出した。
俺は気になり、お姉さんに訊ねてみた。

「それってなんですか？」

「うん？ これ？」

お姉さんは可愛らしく首を傾げた。

「これはギルドカードに書き込んだり、読み込んだりする道具だよ。
例えば今は、君のカードにギルド情報を書き込んだりしてるのよ。
他に言えば、討伐や探索で何を何匹倒したとか、何階まで探索したとかかわかったり出来るの。」

ただ、個人情報に関して言えば、本人の許可無く閲覧できないから安心して」

なにその便利な万能カード。便利だとは思っていたがそこまでか！
それを聞き少し気になったので訊ねた。

「じゃあギルドカードって高価な物なんじゃないんですか？」

「んー、量産はされているからそこまでは……再発行する場合には2000シン入るんだけどね」

再発行でも日本円で二万かよ……物の価値が違いすぎて混乱してくるな。

——ってな事を話していると、機械が止まっていた。

「はい、登録は完了したから確認してみてください」

俺はお姉さんから、ギルドカードを返してもらったと、確認した。

名前：雪村遥

AGE：16

SEX：男

LV：1

JOB：愚者

HP：62

MP：1084

STR：77

VIT：52

AGI：81

DEX：101

INT：4712

RST：9877

LUC：555

マステーマイカー

称号：魔道具創造者特性：無詠唱、魔術感知、魔術操作、物質操作、物理干涉、幻影魔術無効、制約魔術無効、攻性魔術無効

装備：学園制服

祝福：なし

ギルド：冒険者ギルド ランクF

おお！ 登録されているな。

ってあれ？ 称号と特性が増えてるぞ？ ギルドに登録されたから…… な訳ないか。

見たところ多分、俺が○次元靴や何処でもドアを作った事で付いたのだろう。

「じゃあ、改めて冒険者ギルドについて説明するね。

この冒険者ギルドでは主に依頼の仲介、例えば討伐や探索、採取等の依頼を受けているの。

他にも魔物を倒した時に獲られる、素材を買い取りしたりしてるわ。

依頼に関して言えばボードに張ってあるから、その中から選んで受ける事になるの。

依頼によってランクがあって、上はSから下はFまであるから。基本的には、ランクに合った仕事しか請けることが出来ないの。君は今Fランクだから、受けれるのは一つ上のEまでよ。

ランクは受けた仕事の功績で上がっていくから頑張って」

「……どうも」

「他に何か、気になることってあるかな？」

「今回初めてで、討伐系のいい仕事ってないかな？」

「討伐の仕事が受けたいの？」

「……ええ、まあ」

「わかった。チョットまってね」

そう言うとお姉さんは、机の引き出しを開け探りだした。

「討伐って言うけど、どんなのがいいの？」

「ランクはE位で、なるべく城から離れない場所が良いんだけど……」

「うーん、そうね……あ！　ちょうどいいのがあったわ！　これなんてとお？」

お姉さんはそう言うのと、俺に羊皮紙を差し出さした。

ええっと何々、ランクEでレヴィの森のレッドワイルドボアを討伐か……。

ただ討伐で命張ってる割には報酬が400シンって安い気もするが、このランクだったらこんなものなのか……？

まあいいや、実力確認の為に良くのだからこれ位で丁度良いか。

「ああ、これをお願いするよ」

「りょーかい。じゃあもう一度カードを貸してもらえる」

俺がカードを渡すと、羊皮紙と共に機械に入れ、直ぐに返してきた。

「はい、受け付けたわ。依頼が終わったらまたここでカードを出してもらえば確認できるから。」

あとさっきも言ったけど、素材も買取してるからね」

「わかった、ありがとう」

「じゃあ頑張つてね」

俺はお礼を言つと、お姉さんに見送られながら旅立って行くのであつた……。

——つというわけで、やって来ましたレヴィの森。

先程、行くのであつたとかご大層な事を言つたが、プレクスタ城から2キロも離れて無いのです。

いやー、格好付けがいの無い距離だよね？

とりあえずここまで来るのに、ずっと《光学迷彩》^{インビジブル}を使用して来たのだが。

城を出る時以外には、人にも魔物にも出会わなかった。

魔力の無駄遣いだつたよ。

さてと、早速だけど獲物を探るか……たしかレッドワイルドボアだっけか？

直訳すると赤い猪ですか……俺は真つ赤な猪を想像しながら、森

の中を周囲の警戒もせず鼻歌を歌っていると、横の茂みからガサゴソ音が聞こえてきた。

俺は音が鳴るほうへ振り向き確認してみると、茂みから現れたのは。

——ゴブリンだった。

RPGではお馴染みに魔物だけど、現実ゲームのコミカルさは皆無だった。

……寧ろキモかった。

しかも一体や二体では無い——全部で10体は居ただろう。

「あれー？ 俺って今ピンチ？」

……いや、ちょっと待ってくれ。初めての实战でこの数は頑張るすぎだろ！？

ゴブリン達が俺の制止？ も聞かずに一斉にかかって来た。

俺は咄嗟にナイフを引き抜き——はしたが、この数をナイフ一本で対処できる自信は無いので、身体能力強化を自分に掛けた。身体能力を強化された俺のスピードは、雪緒を凌駕するものだが。こんな木々の茂った場所で使えば、自滅するのがオチである。

なので現在自分に掛けているのは、思考加速のみである。

こんな場所で炎の魔術なんて使えば、大火事になりかねないので俺自重。

——といわけで、風の魔術を使う事にした。

俺は思考加速で、コマ落ちの様に見えるゴブリンの攻撃を、バツ

クステップで躲しながら。

右手を前に突き出し風の刃をぶつけた。

ゴブリンの上半身が吹っ飛ぶ。

周囲のゴブリン達は、いきなり仲間の上半身が無くなった事で、戸惑いだした。

俺はその隙を見逃さず。先程の風の刃を周囲全体に大量に生み出した。

結果——俺の前には、細切れになった大量のゴブリンの死体が出ました。

いやー、いきなりだったけど、やれば出来るもんだな。

ああ………そういえば幼い頃にもや以下略。

しかし、この光景を生み出したのに、何とも思わない俺は俺で怖いな。

——たぶん、これが人でも何とも思わないだろう………それが異世界の住人であるのならば。

だってなあ、こつちの世界がどうなろうと知った事じゃないもん。

……俺達に害が無い限りは。

まあ、害があるから牙を剥くんだけどね。

さてと、ゴブリン以外にも、木々が凄い事になっているけど………まっいいか。

いつその事このまま木々を押し倒しながら、探そうかと思ったが、一緒に巻き込んで気が付かなかった………って事に為ったら面倒臭いので自重した。

さてどうするかと考えていると………俺の日頃の行いが良かったの

か——現れた。

恐らく、ゴブリン達の死体の血の匂いに、吸い寄せられたのだらう。

——三匹おられました。

ええー、またかよ。討伐依頼では一匹で十分なんですけど……。というか三匹って、明らかにランクEを超えてるのでは無いですか？

「はあ」

俺は嘆息すると氣をとり直して、試してみたかった魔術を使ってみる事にした。

俺は一番近くに居た、レッドワイルドボア（文字通り赤くて大きい猪でした）に向けて魔術を放った。

すると、いきなり四肢が消失した……レッドワイルドボアは、前兆も無く達磨状態になってしまい、身動きすら取れなくなってしまうた。

俺が使ったのは《一次元の消失（ディメンション？ゼロ）》、風とも違い全くの前兆も無く、まるで消しゴムで、文字を消したかのように消滅するのだ。

試した範囲でだが鋼鉄も消せたので、俺の魔力とも相まってガード不可能な技になった。

さすがに反則過ぎるので余り使う気にはなれないシロモノであった。

まあ今回は、初めての实战で、生き物に使うのも初めてなので試

してみたが。

範囲自体はたいした事無いが、威力は流石だった。

俺は残りの二匹にも使い。四肢を失い、出血しながらも暴れている三匹に、脳天に髪の細さ程のものを放ち絶命させた。

——うん、これは強すぎて訓練にならないな。

しかも、優雅さの欠片も無いではないか。

無言で魔術でもって虐殺って、完全にホラーだよな？

次回からは形だけでも魔術銘くらいは言うことにしよう。

俺は氣をとり直して、売り物になると言われた、牙と皮をナイフで剥ごうと思ったら、魔術で消せば良いじゃないかと思い直した。肉だけを消滅させたら、見事に牙と皮だけが残しました。

——人はこうして便利さに慣れて行き、墮落して行くのだろうか……。

そんな益体も無い事を考えながら、戦利品を鞆にしまいドアを取り出した。

とりあえず、訓練の心算で来たのに、全く訓練になら無かった……。

次はもう少し自重せねばと考えながら、何処でもドアで街まで戻った。

……あつ！ 例の科白を言うのを忘れてしまった！？

様式美って大事だよね？

第七話 それ無理！

この世界に来てから、既に一月が経とうとしていた。

そろそろこの国の連中も、俺達の事を一般民衆に、公表する時期になるかもしれない。

もう悠長に動いている場合では無いのだろう。公表されてしまえば、俺達の顔が知れてしまう。

そうなれば、たとえ逃げ出したとしても、下手に動けなくなってしまう。

そんな事を雪緒と相談していた時にそれは起こった。

トントーン！

不意に扉をノックする音が聞こえた。

「勇者様方居られますでしょうか？」

「ああ」

俺が返事をするのを確認すると、セイナーレが部屋に這入ってきた……。

いや這入ってきたのは、セイナーレだけでは無かった。

亜麻色の髪少女——いや、幼女と表現しても良いかも知れない。

その娘が、セイナーレと伴って泣きながら、俺達がいる部屋に這入ってきたのだ。

泣いているだけならまだ良かった、ただその娘の格好が問題だっ

た——制服に背中に背負っているのはどう見たって……ランドセルだった……。

「なあ、セイナーレ……その娘はなんなんだ」

「はい、勇者様でおられます」

「……はっ？」

耳を疑うような答えが返ってきた……今……何て云った？

「ですから、勇者さまと……」

嗚呼——頭の中が怒りで真っ赤に染まっていく……。抑えろと理性ではわかっているが、感情がついていけそうに無かった。

俺の怒りとともに周囲が呼応するかの如く、魔力が見える程のレベルで揺らぎだした。

「ど、どう云うこと！？ まさかまた勇者召喚がされたの！？」

雪緒も酷く狼狽していた。

「はい、国王陛下が偶然巨大な魔力石を入手されたく、それを利用して呼ばれたらしいと」

俺が調べてわかった事だが、勇者召喚には莫大な魔力が必要となる。

俺達の場合は、あの召喚の間は、元々魔力が集まりやすいらしく、

その上で二百年以上使用されてなかったので、一度に二人も呼ばれたらしい。

ただ、俺達の召喚で殆どの魔力を使用してしまい、本来なら早くても、数十年以上かかる筈だったのだが……。

だから俺は——俺達はその情報を入手して、勝手に安心していた……。

ガリツと奥歯を噛みしめ、手を強く握り締めた。

強く噛みすぎたのか口から血を流していたり、爪が深く食い込み、出血する感覚もあったが、とてもでは無いが、抑えられそうに無かった。

——これは俺の考えの甘さが生み出した事だろう……俺達が逃げ出さなければ、呼ばれないだろうと……。

例え逃げ出してもまだ先の事だろうと……。

雪緒は騎士団長を圧倒した……俺だって片鱗とは言え、この国の魔術師の前で力を見せてしまった

そんな特別な力を持つ人間が……自分達に従順に動いている。形とは云え動いているのだ。

国王は笑いが止まらないだろう。そして更に欲が出るかも知れない——駒を増やそうと。

その結果がこれだ？

「あは……あはははははは——ははははは！」

怒りと間抜けさで、俺は手で顔を覆いながら笑いを零していた。

俺の見通しの甘さが、考えの甘さが、行動の甘さが この事態を招いた。

何故思い至れなかったのだ、その程度の事を。その程度の発想を……。

そうだ……偉そうな事を言いながらも、悠長に事を構えていた俺の責任でもある。

だけと呼ばれたのがこの娘だと？ どう見たって子供だ。 そう、俺だって子供だ。

だけどこの娘は幼く、どう見たって小学生で……両親の名を呼んで、泣いている子供に、世界を救ってくれて叫ぶのか？ 縊るのか？

この国は？ この世界は？ 嗚呼……そんな世界ならば滅んでしまえ！！

「ふざけ——！」

俺はセイナ―レに問い詰めようとするが——俺を呼びかける声が聞こえた。

「だ、ダメ！ 遥くん抑えて……お願い。」

先程まで取り乱していた雪緒だったが、怒りで自傷を厭わない俺をみかねて、俺の手を掴み止めに掛かった。

「だ、ダメ、ダメだよ遥くん、気持ちにはわかるけど、お願い！ 今は抑えて」

雪緒は俺を抱きしめながら、優しく語り掛ける様に言った。

「今遙くんが動いちゃダメ、下手をすればこの子を巻き込んだじゃう……」

その一言で俺は一気に頭が冷えていった。

「あ、ああ……そう……だったな。」

ありがとう雪緒……」

「う、うん……うん……」

そうだ、まだまだ、まだ早い、今がその時ではない……怒りは噛み殺せ、今は雌伏の時だ。

俺はセイナーレに向きなおすと、訊ねた。

「その娘を俺達の前に連れて来たって事は、俺達と同じように扱うのか」

「はい、その通りでございます」

幼かるうが関係無しか……表面だけは繕っているが、どう考えたって奴隷だね。

奴隷——で思い出したが、この娘にも例の魔術をかけているのか……？

「なあ、この娘にも例の魔術はかかっているのか？」

セイナーレは例のと云われて、少し考えていたが、すぐに思い当たったのか答えた。

「はい、国王陛下の対応をみるに、恐らくは……」

また怒りで頭に血が上りそうになったが、雪緒が手を握ってくれたお蔭で、何とか抑えた。

「……そうか」

「新しい勇者様は、お二方のどちらかと共に、一緒に暮らして頂けないでしょうか」

勇者は未だ公表されていない存在だ。

だから一緒に預けてしまおうって、考えなんだろう。

この娘はまだ幼い、尚の事この国の連中なんかに預けられる訳が無い。

なので是非も無い申し出だ。

「ああ、わかった、その娘は俺達が責任持って預かるう」

「左様でございますか。ありがとうございます。」

あと序では申しますか、事情等の説明につきましても、お二方にお任せ致します」

セイナールは俺達に用件だけ告げると、連れて来た娘を残して出て行った。

「ここに連れて来られた少女（いや幼女か？）は、暫く泣いていたが、漸く^{おもう}落ち着いたので、話を訊く事にした。

「お姉ちゃんたちだれ？」

——お姉ちゃん……たち？……たち……だと？

俺はその科白を聞くと、徐に窓枠に足をかけた。

それに気が付いたのか、雪緒は慌てて俺を止めにかかった。

「は、遥くん！ ダメだよ。ここ三階だよ。幾ら遥君でも、こんな高さから落ちたら怪我しちゃうってば」

「離せ雪緒！ お願いだから逝かせてください！」

「ダメだよ。危ないよ！」

「だって、俺のこと、お……お姉ちゃんって……」

「遥くんが、性別を間違えられるのを、気にしているのは知っているけど、今は我慢して！」

「それ無理！」

俺は雪緒から手を振り払うと、窓の外に飛び出した。

「ア——イ！ キャ——ン！ フ——ラー——イッ！」

てな遣り取りが、有ったとか無かったとか。

というわけで色々話を訊いてみたが、名前は御影絆と言い、小学二年生でまだ七歳らしい……。

絆は俺達の説明を聞いて、直ぐに理解してくれた。なんて聡明な娘なんだろう。

同じ年の頃の俺を思い出すと、恥ずかしくなってくる。

ランドセルを背負って居たからわかる様に、下校の途中に、俺達と同じように、気がついたらあの部屋に居たらしい。

気がつき見渡せば、知らないジジイ共に囲まれていたら、それは怖かっただろう。

そしてなにより《隷属の魔術^{アレ}》だ、俺には効かなかったが、雪緒に訊いた話では、全身に激痛が走るらしい。

それを訊いてまたキレそうになったが、絆の前なので自重した。

「おにいちちゃんどうかした？」

絆は俺を見上げてきた。

——そう、何故か今、絆は俺の膝の上に座っている。

座り位置を確かめるように、俺の太腿にグリグリとお尻を擦りつけたりしてるんだが。

……これって、何かの拷問でしょうか？

いろいろ話したり、訊いたりしてる内に……異常に懷かれた。

何か自分の事で怒ってくれていた事が、嬉しかったらしい。

他にも椅子は空いているのだが、そちらに座るのでも無く、俺の

膝の上に座り、嬉しそうに見上げているのだ。

となりに雪緒がいるんだが。俺達をジッと見つめて……いや、何故か睨んでいた。

痛い、視線が痛いですよ。雪緒さん……。

「……いや、な、何でも無いよ……」

いや、何でも無い事はないですよ？ 具体的に言えば雪緒の視線が怖いから、膝から降りて欲しいな！。何て思っているんですが。流石にさっきまで泣いていた絆に、言うのは憚られた。

「絆ちゃん……遙くんも困ってるみたいだし、そろそろ降りてあげたら？」

おお！——雪緒さんよく言ってくれた。

「ヤッ！」

絆は無言を言わず、雪緒の申し出をぶった切った。

雪緒の顚口こめかみがピクピク動いている。だから怖いですって。

何で俺まで睨むんですか？

俺はその状況に、ただ苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

しかし、これからの対応を、真面目に考えなくてはいけなくなっ
た。

今までは何だかんだで、暫く再召喚は無いだろうと、高をくくっていたのだ。

これでは魔力石が見つかれば、また同じ事が行われる可能性が高

いだろう。

そう成らないように、気をつけて行動していた心算だったのだが、そうなつては本末転倒だ。

—— だったらそろそろ、力ずくと云う手段も考慮に入れて良いだろう。

魔術を掛けた魔術師に、解呪の方法を口を割らすか、もしくは殺害と云う手段もある。

なんせ此方には、連中が知らない切り札を何枚か持っているのだ。
ジョーカー

ただこの手段をとる場合には、二人には知られ無いようにしないとな。

彼女達は巻き込まれたただけだ。

あんな連中とは言え、彼女たちが態々手を汚す必要は無いだろうから。

第七話 それ無理！（後書き）

ご意見がありましたので補足しておきますが、主人公はロリコンではありません。

意図せずグリグリ刺激されれば、ある部分は反応しそうになるものだと思います、そう表現しました。

寧ろ子供に反応しちゃ駄目だろ。

第八話 マジパネエっすよ。

俺は絆の力を調べる為に、ギルドカードを使ってみる事にした。まだ幼いとはいえ、勇者召喚で呼ばれている以上、俺や雪緒に近い能力を持っているかもしれない。

これから先の行動を考えるのに、絆の力を知っておいた方がいいだろうと、考えたからだ。

ギルドカードの予備は、事前に城の中で、何枚か調達して鞆に保管しているの、それを使う事にした。

俺達が来た時には、セイナールに貰ったんだが、今回は貰えなかったの、何でだろうと疑問に思ったが、俺が幾ら考えても詮無いので、この場では考えない事にした。

ただ単に、忘れただけの可能性もあると思うし。

俺は絆を膝に乗せたまま、鞆から未登録のギルドカードを取り出した。

「おにいちゃん。それなに？」

絆は、俺の持っているギルドカードが気になったのか、訊いてきた。

「ああ、これはギルドカードって言って、まあ簡単に言えば、身分証明みたいなものかな」

「そおなんだ？」

絆は俺からカードを受け取ると、興味があつたのか、表裏を確認

しでした。

——そして、そんな光景を、ジッと睨みつけている雪緒さんが横に居ました……。

その、なんというか、もの凄いプレッシャーと目力で、非常に怖いです。

そして、そのプレッシャーをもとめてない絆さん——流石としか言い様がありません。

お兄さんは今すぐにでも逃げ出したいです。脱兎のごとく。

あれから絆は、気がついたら、俺の膝の上に座っているのだ。この世界での、特等席らしい。

——そして、日に日に何故か、雪緒からのプレッシャーがあがって来ている。

女の子はよくわからん。

ともかく俺は、雪緒のプレッシャーに耐えながら、説明を再開した。

「これ、何も書いてないよ？」

「これには、文字を書く為に血が必要なんだ。」

「……血？」

絆が不思議そうな表情を浮かべている。

俺は自分の髪の毛を引き抜くと、魔力を通して、一時的に針と同じ硬度にした。

「で、絆には悪いんだけど、指先にチクツとこれを刺して、カードに血をつけて欲しいんだ。」

「……エッ!？」

絆はそれを聞き、少し驚き怯えた表情を浮かべた。

「本当に、指先にチョットだけでいいんだ、血を付けたら直ぐに俺が治してあげるから」

そう、俺は大怪我でもない限りは、治癒魔術で治すことができる。

「……本当?」

「ああ——本当だ」

絆は俺の言葉を信じてくれたのか、俺の髪針を受け取ると、恐る恐る自分の人差し指に刺した。

刺した事で、人差し指からプクツと血が出てきて、ギルドカードに血を塗っていた。

血を塗った事を確認した俺は、直ぐに治癒魔術を、絆の指先に施した。

「絆。痛みはまだあるかい?」

「ううん。ぜんぜん」

絆は不思議そうに、自分の指先を眺めたり、舐めたりしていた。

「うわぁ……本当に、ぜんぜん痛くないや」

「そっか——よかった」

俺は絆を誉めるように、頭を優しく撫でた。

その光景の隣で、また怒ったような、物欲しげそうな、何とも言いがたい表情を浮かべた雪緒が居りました。

……雪緒も頭撫でて欲しいのかな？

「うわ、うわぁ……なんかこれ光ってるよ？」

絆は感嘆の声を上げていた。

恐らくギルドカードに、能力ステータスが表示されたのだろう。

「絆。良かったら俺にも見せて貰ってもいいかな？」

「ん？ おにちゃんも見たいの？——はい」

俺は絆からカードを受け取ると、絆ステータスの能力を確認した。

名前：御影絆

AGE：7

SEX：女

LV：1

JOB：聖女

HP：351

MP：344

STR：127

VIT:189
AGI:99
DEX:135
INT:812
RST:697
LUC:2858
称号:プレクスタの隷属
特性:聖女の威光、高速詠唱、呪術解除、呪術感知、魔術耐性
装備:学校制服
祝福:なし
ギルド:なし

——なにこれ？ 俺や雪緒に比べても、全体的に能力高すぎるだろ……。

職業が《聖女》って事は、俺と同じで《勇者》では無いのだろうけど、能力値だけで言えば、《勇者》であろう雪緒より強いじゃないか。

……《勇者》より強い《聖女》ってなんですか？

HPが紙な俺に対しても遥に高いし、何より運が高すぎるだろ……。年下でもある絆が、俺達よりも強いかも知れないと思う能力値を見つめていると、ある項目に気がついた。

《呪術解除》

……チョット、まってくれ。俺は自分の頭を抑えながら考えた。ええっと、もしかしてこれ、奴らに掛けられた魔術を解除できるんでは無いかい？

俺は一ヶ月アレだけ探ったのに、全く解除手段が見つからなかったのに、ここにきてこういう事って有りですか？

俺はいろんな意味で、眩暈がしてきた。これがそうならば、俺の一ヶ月は、完全なる徒労では無いか……。

まあいい、鴨が葱背負って遣って来たんだ、ラッキーだと思って開き直るしかない。

早速だけど、試させて貰おう。

「なあ絆、頼みたい事があるんだけど」

「なに？ おにいちゃん」

「ちょっと雪緒に違和感が無いかどうか、試してほしいんだ」

絆にある特性アビリティ《呪術感知》これが俺の持っている特性と、同じ様な物ならば、もしかしたら何かを感じるかも知れない。

「……遥くん。どういうこと？」

雪緒も俺の頼みに不思議そうに訊いてきた。

もしかしたら……なので、万が一違ったらぬか喜びになってしまうので、答えをはぐらかした。

「——ちょっと気になる事があってね。試してみたくなったんだ」

雪緒も絆も俺の答えに、とりあえずは納得してくれた。

「で、おにいちゃん。絆はどうすればいいのかな？」

「ああ、雪緒に手を翳す様にして、何か感じるか集中してみてくれ」

「うん！」

「雪緒はそのまま、動かないでいてくれ」

「……ええ」

俺がそう説明すると、絆が手を目の前に差し出した。そして目を瞑り、ウーン、ウーンと唸っていた。

「……………」

俺も雪緒も黙っていると、絆が声を上げた。

「……あれ？ なにこれ？」

「どうした、何かあったのか？」

「うん……ゆきおおねーちゃんの中に、なんかモヤモヤしたものがあるの」

モヤモヤ？ もしかしてそれが、例の魔術なのか？

「絆。そのモヤモヤを消す事って出来るか？」

「うーん。よくわかんないけどやってみる」

そう答えると、絆は再び同じ格好をして唸りだした。

俺達は黙って見つめていると、俺は雪緒の体から、魔力が消えていくのが見えた……。

「おにいちゃん。よくわかんないけど、ゆきおおねーちゃんからモヤモヤが消えていったよ?」

「雪緒! チョット、カードを確認してくれないか!?」

雪緒は不思議そうな表情をしていたが、俺の言葉に素直に従った。
——絆の能力が確かで、俺の《魔術感知》がアレを見たとしたら、もしかしたら……。

「……えっ!? なんで?」

雪緒の反応を見るに、俺の予想は正解だったみたいだ。
なんていうか、絆さんマジパネエっすよ。

「遙くんも見てみて!?」

雪緒は俺にもギルドカードを見せてきた。

名前:五十鈴雪緒

AGE:17

SEX:女

LV:4

JOB:勇者

HP:411

MP:221

STR : 296
VIT : 309
AGI : 294
DEX : 239
INT : 217
RST : 222
LAC : 1051
称号 : なし
特性 : 危機感知、高速治癒、高速移動、高速詠唱、見切り、肉体強化
装備 : ベイルの聖衣
祝福 : なし
ギルド : なし

……もう俺いらなくね？ 《勇者》と《聖女》でもの凄く形にな
ってるし。

ここに俺の《愚者》って意味がわからん。

なんて事を二人に言えば、泣かれかねないので言える訳が無いの
だが。

自分でも言うのは何だけど、二人とも俺に依存し過ぎな節がある
し……。

頼られるのが嫌って訳では無いんだよ。

雪緒も絆も美少女って言えるような娘だし。

ただ、俺が居なくなったらヤバイな、何て思わなくも無い。

まあ俺も、居なくなる予定も心算は無いのだから、特に問題は無
いか……。

ともかく、最大の懸念だった問題が解決されたのだ。
あとは逃げ出す準備をするだけだ。

まあ此処までされたのだ、ただで抜け出す心算など更々無いのだ
が。

第九話 そんなん知らんがな。

俺達を公表する日が決まったらしい。

それは、十日後にあるという、建国記念祭にて、大々的にお披露目するらしい。

勇者が召喚されるのは、数百年ぶりという事で、国民の人気取りや、他国への牽制の意味合いもあるのだろう。

つまり、現時点では一般市民には、勇者が召喚されたと云う事実だけが、公表されているのだ。

完全に顔が公表されてしまえば、俺達は下手に逃げ出せなくなってしまうので、逃げ出す準備を始めた。

「武器……ですか？」

そう言ったのは雪緒だった。

「ああ、専用武器を創ろうかと思う」

「遙くんはもう、なんでもありですね……」

何故、このような会話になったかと言うと、これから先の事を考えて、武器を用意しようかと思ったからだ。

この国を出た後、どうなるかは分からないが、外には普通に魔物が存在するのだ。

だったら、自衛の手段の一つとして、武器も必要になってくるだろう。

俺は何処でもドアを作った際に、称号《魔道具製造者》マスターメイカー取得している。

他にも取得した特性で、武器ぐらい創れるんじゃないのかと思った。

俺は今後の資金や報復を考え、この国の宝物庫に忍び込んだんだが、流星は神光国家を名乗っているだけあって、宝物庫の中には金品の他に、聖剣やら魔槍など沢山あったが、そのまま使うのは面白くないと思い、特性《物質干涉》アビリティ《物質操作》インゴットを試してみたら——金属塊になりました。

まあ、見る人が見たら、もの凄く罰当たりな行動なんだろうけど、そんなん知らんがな。

ともかく、お蔭でオリハルコンやミスリルといった、金属塊が手に入ったのだ。

忍び込む際当然だが宝物庫にも、魔術によって封印されていたが、例の如く俺の魔術抵抗力の前では無意味でした。

もちろん、金品の方もゴツソリと、鞆の方に戴いておりますよ。ただ鞆の口の大きさなど、高が知れているので、収納する時にはもの凄く苦労した。

それも今なら、いい思い出と思い出せ……そうにも無いな。

持ち出した事がバレないように、再封印した上で一応幻術の魔術を掛けておいたので、この国の連中が、まず宝物庫から持ち出そうと考えない限りはバレないだろう。

まあ後十日持てばいいのだから、楽勝だろうが。

ともかく、折角こんないい物が在るのだから、有効活用しようと考えた。

俺はぶっちゃけ魔術が反則チートなので、武器などは要らないのだが。

雪緒や絆は高速詠唱があるとは言え、それでも詠唱に時間がかかる上、魔力量も俺に劣る。

だったら、金属塊インゴットに戻せるのなら、武器にも創り直せると思いついたのだ。

——本当に何でもありだな俺？

「で、雪緒は何か希望があるかな？」

「ねえー？ 絆の分ある？」

先程から雪緒ばかり相手にしていたので、少し頬を膨らませた絆が訊いてきた。

「ああ、絆の物も後で創ってやるから、チョット待ってて貰ってもいいかな？」

「うー。……わかった、待ってる」

絆はそう言うと、俺のベットの上にパタリと倒れ、足をバタバタさせていた。

俺は気を取り直すと、再び訊ねた。

「さっきも言ったけど、希望はあるかな？」

「それって、どんな物でも出来るんですか？」

「ああ——多分だけどね。実際にはまだやった事が無いから、出来るかどうかはわからないけど、折角だから二人に合わせた物を創りたいなと思って」

「そう……ですか、だったら刀はできますか？」

「——刀？」

「はい。この世界に来て、あたしなりに調べたのですが、刀の様な武器は存在しないらしくって」

「ってことは、雪緒は剣道か何かの経験者なのかな」

「ええ。剣道では無く、剣術なんですけど……」

初めて戦う所を見たとき、何かしらの経験者かとは思ってたが、まさか剣術とは……。

「剣術なんて使えたんだね」

「お父様に、幼い頃から教え込まれたの」

……お父様入りました！。流石は清蘭に通ってただけあって、お嬢様だったんだろうね。

「そ、そうか……ともかく刀ね」

刀か——この世界では刀は、管理とかいろいろ面倒だから、作られて無いのかもしれないな。もしくは技術が無いか。

ともかく、雪緒が扱いなれているのなら、それを用意してあげるべきだろう。

「わかった。やってみる」

俺はそう言うと、鞆からゴソゴソと金属塊インゴットを取り出した。今回使用しようと思っっているのは、聖剣からとりだしたオリハルコン。流石は聖剣でした。まさかオリハルコンが作れるとは思わなかったが、折角だからこの際使おうと考えたのだ。

——やっぱり勇者の武器と云えば、オリハルコン製だろう。

「それで悪いんだけど、この金属塊インゴットに血を垂らして欲しいんだ」

「——血……ですか？」

「ああ、さっきも言ったけど、専用武器って事で、雪緒以外には使えないようにしたいんだ。

それで、ギルドカードみたいに、雪緒の個人情報パーソナルを登録しようと思っ

「……遥くんが、そう言うんでしたら」

俺が髪針を雪緒に渡すと、躊躇無く指先に刺した。

……雪緒さん、男前過ぎるぜ！

「これで、いいですか？」

雪緒は金属塊インゴットに血を垂らすと、俺にそう訊いてきた。

「ありがとう。これだけあれば十分だよ」

俺は雪緒にそう告げると、出血している場所に治癒魔術を施した。

「じゃあ、やってみるから、少し下がってて」

「——はい」

雪緒が下がるのを確認すると、俺は《物質干涉》《物質操作》《魔術操作》を使用した。

……折角だから、成功するかどうかはわからないが、アレを試すことにした。

金属塊メタルが輝き、次第に刀の形に様相を呈してきた。
輝きが収まると——日本刀が出来上がった。

それにしても、出来るとは思ってたはいたが、本当に出来るとは……。

「雪緒。チョット試してみて」

俺はそう言うと、雪緒に先程出来たての、日本刀を渡した。
雪緒はそれを受け取ると、無言で刀を振り始めた。

次第に——もの凄く優雅な剣舞を舞だした。
俺が見蕩れていると、それに気がついたのか、雪緒が少し恥ずかしげに刀を返してきた。

「は……遥くん？」

「はっ！——ああ、悪い見蕩れていたよ」

「——へっ？」

俺の言葉を聞いた雪緒は、顔を真っ赤にしていたので、俺は訊ねた。

「どうかしたのか？　もしかして体調でも悪いのか」

「いいいいいい、いえ！　なんでも無いでしゅ！」

吃り嚙んだので、少し気にはなったが、本人が大丈夫だと言うので、気にしない事にした。

「そ、そうか。大丈夫って言うんならそれでいいが。

……それでその刀はどうか？」

「はい。かなり良いですよ」

「——そっか、良かった。後ためしに、その刀に魔力を流してみてくれないか」

「魔力……ですか？」

「ああ」

「……わかりました」

雪緒はそう言い、刀に魔力を流しだすと薄く輝きだした。

『ハジメマシテ。マイマスター』

「……えっ？」

雪緒はいきなり呼びかけられ、驚いていた。

「えっ？ えっ？ どこから声が？」

俺は、笑いがこみ上げてくるのを抑えながら答えた。

「ククッ——それ、その刀から呼びかけられたんだよ」

『ソノトオリデス。マイスターハルカ』

再び呼びかけられて得心いったのか、雪緒は刀を見つめた。

「貴方が呼んだの？」

『ハイ。マイマスター』

「遙くん。これって？」

「うん。それはアニメとかを参考に創った、インテリジェンスウェポン魔導知能兵器って物。どうせだからだかと思っ、試してみたんだ。

——まさか本当に成功するとは思わなかったんだけどね。」

なんでもでは無いだろうけど、大概の事は出来るな俺。

「インテリジェンスウェポン魔導知能兵器ですか……？」

「ああ。一応人格は女性格には設定しているから。戦闘とかでも状況に応じて、魔術とかでサポートしてくれるかと思っ、ね。」

ただ、まだ産まれたばかりなんで、単純な受け答えしか出来ない

から」

「そうなんだ……ええっと、よろしくね。……あたしはなんて呼べばいいのかな？」

「ん？ ああ、その刀の銘は雫って言うんだ、《霊刀・雫》が正式な名前になるのかな。

一応雪緒の名前に引っ掛けてみたんだけど」

雪が溶けて雫になる——安直かもしれないな。何の捻りもない自分のネーミングセンスの無さに、鬱になってくる。

そんな俺の葛藤なぞ知らず、雪緒は雫に挨拶していた。

「そうなんだ——よろしくね雫」

『ハイ。ヨロシクオネガイシマス。マイマスター』

俺は気持ちを切り替えて言った。

「さっきも言ったけど、雫は雪緒にしか扱えないから。

他に例外居るとすれば、一応製造者の俺ぐらいなんだろうけど……。

ともかく、その子は雪緒の相棒って事で、良ければ大事にしてやって欲しい」

「ハ、ハイッ！ 遥くんからの贈り物ですからね」

雪緒は嬉々として、雫を抱きしめていた。

——おいおい、むき出しの刀を抱くとか、危なすぎるだろ。

そういえば、鞘を創るのを忘れていたので、鞘からそれらしい材料を取り出すと 鞘に変化させ雪緒に渡した。

「剥き身の刀を抱くのは危ないから、これの中に仕舞った方がいいよ」

「あ！ そうですね。わたしったら、つつっかり……」

雪緒は俺から鞘を受け取ると、刀身を仕舞った。

……つつかりで自傷でもしたら、洒落にもならんだろうと思ったが、俺はおくびにも出さなかった。

そして今までベットの上で、俺の枕の匂いを嗅ぎながら、恍惚としていた絆に声を掛けた。

「そ……それで、次は絆の番なんだけど……」

「う……ん……？ お兄ちゃん呼んだ？」

今まで静かだったから寝ていたと思っていたが、完全にトリップ中です。ありがとうございました。

——絆よ、その歳で匂いフェチとは、ハイレベルすぎるだろう。俺は気持ちを切り替えると絆に訊ねた。

「……も、もしかして寝てたかな？」

「ううん。はふー、お兄ちゃんの匂いを堪能していたの。……ふいー」

わざと寝ているか訊いたのに、正直に答えないでくださいよ……時折艶っぽい溜息が出ているし。

恐るべき七歳児。いまどきの小学生ってこんなのか？ だとすればレベルが高すぎるぜ！

「そ、そうか。それは良かった」

……それは良かったのか？ 自分で言っていて訳がわからなくなってきた。

「うん。けっこうなお手前で……」

え？ 匂いでなにか、上手いとか下手とか存在したのか？

——匂いって奥深いんだな……。

……って、ヤバイ、だんだんついて行けなくなってきた。

「ああ……ありがとう？」

「……うん」

俺は気がつけば、何故かお礼を言っていた……。

このままではイカン！ 俺は話を切り替えるために言った。

「——そ、そう。そろそろ絆の分に取り掛かろうと思っただが、絆も希望があるかな？」

「う、うーん？ 絆はゆきおおねーちゃんみたいに戦えないし……わたしって魔術つかえるんだよね？」

「ああ、その筈だけど」

「だったら、魔法の杖みたいな物……できるかな？」

絆は上目遣いで俺を見てきた——この娘わかってらっしゃる。これがもし計算だとしたら末恐ろしいよ……。

俺はこの行動が天然である事をただただ願った……。

「ああ——大丈夫だと思う」

「本当！？　じゃあおねがい」

「あいよ」

俺は鞆から、魔槍から戻したアダマンタイトと金を取り出し。ふと——思いつき、更にムーンストーン媒体にすることにした。

アダマンタイトと金は、魔術性能と含有魔力を引き上げる為に、混合する事にした。

通常じゃそんな芸当など出来はしないが、そこは俺のハチャメチャ魔術です。

俺は絆に、雪緒と同じ様に血をお願いすると……こちらも躊躇いなぞ無かった。

ヤバイこの二人、明らかに俺よりも男前だ。俺が女だったら惚れてるね！

「お兄ちゃん。これでいい？」

「ああ……何て言うか、カッコいいな」

「……？」

絆は俺の誉め言葉を、理解はしていなかったみたいだった。さらに自分で治癒魔術を使って治しているよ。

……嗚呼、もうお兄ちゃんいらないね……等と、訳のわからない感慨に耽っていると。

「お兄ちゃん。泣いてるの？」

俺は、そう言われて初めて、涙を流している事に気がついた。もう、わけワカメ。

「何でも無い、何でも無いんだよ」

そう、アンタなんかの為に、泣いてるんじゃないんだからね！

「う、うん？ ……お兄ちゃんがそう言っただった……」

絆は腑に落ちない表情をしていたが、一応納得してもらった。

……あれ？ 俺年下に気を使われてる？ その事に気付き俺は愕然とした。ともかく、俺は気持ちを切り替えると、再び作業に取り掛かった。

——創る物をイメージする。

刀の場合は、元の世界で昔に見て触った事があったから、比較的簡単に出来たが、今回は完全に想像だ。

俺は魔法少女をイメージしながら、能力^{ちから}を行使した。

合成金属とムーンストーンは、融合し次第に——指輪に成っ

た。

それを見た絆は、不思議そうに訊ねてきた。

「あれ？ 杖を創るんじゃないの？」

「いいや、これで成功だよ」

「……？」

絆は俺の答えに、不思議そうな表情を浮かべている。

「じゃあ、これを指にはめて魔力を流してごらん」

絆は俺から指輪を受け取ると——左手薬指にはめました。

今まで黙って横で見ていた雪緒は、絆の行動を見て咎めた。

「……き、絆ちゃん。なんでわざわざ、その指にはめるのかな？」

穏やかな般若が、顚口こめかみと口角をヒクヒク吊り上げながら言った。

俺は横で、ブルブルとチワワの如く恐怖で震えている。

そんな俺の行動も意に介さず、絆は答えていた。

「お兄ちゃんがくれた物なんだよ。他にどこにつければいいの？」

「あははー。それってどういう意味かな？」

怒りで笑いが出てますよ雪緒さん

俺は恐怖に耐え切れず、二人の仲裁に入った。

「——ま……まあまあ、雪緒子供がすることだし……ね？」

「む、ムウー。遙くんがそう言うんだっ……」

「絆も、挑発するような事を言わないの」

「はい」

俺は殴り合いの試合で、レフェリーとして突っ込んだ気分だった……。

一応雪緒の方が年上って事で、渋々だが引いてくれたみたいだったが。

ともかく俺は、再び説明を再開した。

「じゃあ、チョット魔力流してみて？」

「うん……こう……かな？」

絆がムーンストーンの指輪に魔力を流しだすと、絆と共に輝きだした。

次に輝きが収まると、絆は杖を手にして格好も変わっていた。

——おっしゃ！

俺は心の中でガッツポーズをした。

魔法少女といえばヤッパリ変身だろう。

今の絆は、普段はストレートの亜麻色の髪を、ポニーテールに纏めており、服装も学校制服から、腰に大きなリボンをつけた真っ黒のゴシックドレスになっている。

そして手に持っている杖は、月をイメージして作り出したのだ。

「――へ？　これ？」

「どうだ？　魔法少女ってイメージで創ったが」

なんとなくでイメージしたのだが、俺の中の魔法少女はゴスロリだったのか……。

「……うん」

「……遥くん……なんていうかも……何でもありだね」

あれー？　ダメだった？

……もしかして、ゴスロリか？　ゴスロリがダメだったのか？

「……その……もし、気に入らなかったら……ごめん」

俺はガクーンっと、テンションがダウンした。

何故だ？　ゴスロリってそんなにダメなのか？　ゴスロリだぜ、ゴスロリ。

部屋の隅で体育座りをして、イジイジとの字を書いていると、絆に声を掛けられた。

「うっん。驚いたただけだから。うん。気に入ったよ、何しろお兄ちゃんが生ってくれた物だから！」

「……そっか、ありがとう」

俺は慰めに、抱きしめてきた絆を俺から抱きしめ返し、頭を撫で

ていると……雪緒さんが睨んでいました。
あれー？　なんで？　何処かで選択肢を間違えたかな？
果てし無く怖いです。

俺、最近雪緒さんに睨まれてる事多くないですか？　本当なんですか？……？

「お兄ちゃん。これって喋るの？」

「ん？　ああ、これには魔導知能兵器インテリジェンスウェポンでは無いよ」

「……そうなんだ」

「うん？　もしかして、そうして欲しかったの？」

「……うん」

雪緒みたいに前衛って訳でもないから、そういったサポートもいらないと思い、代わりにいろいろ変身機能を入れた為に、省いていたのだが、入れた方がよかったのか。

「——わかった。チョット指輪を貸してくれる」

「うん」

絆はそう言うのと変身を解き指輪を渡して来た。
……変身の解き方とかまだ教えていないのに、もう使いこなしているよこの娘。

俺は指輪を受け取ると、再び魔力を押し込んだ。

「よっし、これで大丈夫だと思う」

俺はそう言っていると、絆に指輪を返した。絆はそれを受け取り、指に着けなおした。

「それじゃあ、呼びかけてごらん」

「——うん。こんにちは」

『ハロー、マスターキズナ』

絆が呼びかけると、指輪から返答がした。

「うわぁ……うん、はじめまして、ええっと？」

「それは、ムーンライトって言っんだ」

「うん、はじめまして！ よろしくねムーンライト」

「イエス。マイマスター」

もちろん人格構成は、女性に設定しましたよ。
雪緒や絆を男性人格に任せれる訳がない！

そういえば魔道具って、かなり高額で取引されてるんじゃないかな
たっけ？

たしか最も安い物でも1000000シンだとか言っていたよな。
俺のこの能力ちからを使えば大儲けが出来るのでは……。
そう考えもしたが、自重する事にした。

自分で言うのもなんだけど、この様な強力な魔道具を売りに出せば、絶対に目をつけられるだろうから。

これ以上の面倒ごとはご免だ。

しかし残り十日とはいえ、まだ時間は多少残っている。

その間にできる、俺は更なる暗躍を考え始めた……。

そう、早速だけど女風呂をのぞ……。

第十話 本当だよ？

覗きになんて行ってませんよ？ 本当だよ？

暗躍その壱

で、やって来ました プレクスタ で最も大きい、公爵領です。元々情報収集の際に、有力貴族に關しての情報を得てはいたので、復讐と実益も兼ねて、財産などを盗み出す予定だったのだが、今までは万が一バレた場合、雪緒に迷惑がかかると思い自重していた。しかし最もの懸念材料だった《隷属の魔術》が解除され、更に時間も無いと云う事で、行動に移す事にした。

流石は公爵家だけあって、プレクスタ城には及びはしないが、かなり立派なお城でした。

俺は《光学迷彩》インビジブルを使用して、堂々と宝物庫など、城内の財宝を隠している場所を探る。

大概セキュリティの為に、魔術で出入り口など封じていたりしていたが、王城の宝物庫でさえ問題にならなかった俺にとっては、それは無いに等しかった。

俺にとって最大の問題は、鞆に収納する際だ……あれだけは何とかなりませんか？

この世界でも非力な俺に取ったら、金塊の重さは洒落にならない。治癒魔術が無かったら、翌日筋肉痛ですよ……。

この世界の金を持っている貴族連中は、概ね魔術などでその場所を隠している事が多い、だから《魔術感知》を持つ俺には、鴨に過

ぎなかった。

寧ろここに何かありますって、教えてくれているような物だ。

……ヤバイ、笑いが止まらない。

とある貴族の書斎に押し入った時は、入り口が魔術で封じられていたので、おかしいなとは思ったが——出るわ出るわ灰色では無く、真つ黒な帳簿などの書類たちが。

軍事に関する物もあったので、敵対国に売れば高く売れると思うたけど、それをすれば悪目立ちしそうなので、自重する事にしておいた。

しかしどこの世界も、政まつりごとに関わる人間は黒い、黒いね。

まあ一応念のために、鞆の中に保管させて頂いたけど……。

まったく、いい事をする気分がいいぜ。

俺は、王都内と城から半日で通える範囲の貴族から、片っ端から盗みに這入ってやった。

金銀財宝はもとより、武具の類は全部金属塊メタルブロックに戻して鞆に押し込んだ。

もちろん幻術を掛けた上で再封印しましたよ。

今回は十日程で解けるように設定しました。逃げた後バレたら面白そうだしね。いきなり一文無しになるんだし。

いきなり俺達に国を救えとか、それで命をベットしろとか言ったんだ。その程度の代償は背負って貰わないとね。

俺も逃げ出す為に、先立つ物があるから。

さらに暗躍その式

忌々しい召喚の間にやって来ました。
ぶっちゃけ、この部屋の正式名称は知らないのだが、興味も無いし知りたくも無い。

ともかく、仕掛けを仕込んでいく事にする。

具体的に言えば《次元の消失》ディメンション？ゼロを仕掛けておいた。

これは再召喚をしようとするか、俺の合図で発動する様に設定している。

魔方阵自体に壊されない様、防御魔術が使われていたが、事前にディメンション？ゼロ《次元の消失》で色々試していたのだが、俺の魔術抵抗レジスト力すら貫通したので、誰が掛けたかは知らないが、問題にもならないだろう。

そして、俺はこの城内に存在する書庫全てに、同じ様に仕掛けておいた。

さらに念の為に、この国の魔術師の部屋、全てにも仕込んでいる。

これで、この国での勇者召喚なぞ、ふざけた事が出来ない筈だろう。

そんな感じで、コソコソと暗躍しながら一週間が過ぎ、建国記念祭……つまり俺たちが、お披露目される事に差し迫っている三日ほど前。

雪緒は初日に騎士団長を圧倒してしまったので、そのお蔭か訓練自体は任意に成っている。

なので今回は、雪緒も絆も訓練には参加していなかったが、俺は偽装の為、この連中に落ち零れと思いこませる為にも、日常通りの剣術の訓練が終わり部屋に戻っている途中、騎士の集団に出くわした。

ここに来て既に一ヶ月以上経っているのだが、俺が見たことも無い連中だった。

男女10人程の騎士の集団……その先頭に立っている騎士——長身二枚目で、男の俺からしたら劣等感を煽られる人物だが、その男の装備している物が気になった。

俺の特性《アビリティ魔術感知》が、男の鎧と剣にかなりの魔力が有しているのを見て取れたのだ。

俺が宝物庫で見た、聖剣に匹敵するかも知れない。

俺はその人物が気になり、セイナーレを捉まえて問いただした。

「——それは恐らく、ガフォーク？ヴェルヴェック様かと思われま
す」

俺はその名前に聞き覚えがあったが、念の為に訊ねる事にした。

「……誰なんだそれ？」

「はい。勇者様は《ナイト・オブ・グロリー栄光の騎士》をご存知でしょうか」

「——ああ」

ナイト・オブ・グロリー

《栄光の騎士》——ここ『神光国家プレクスタ』が誇る最強の騎士団の名前だ。

如いてはこの『レミール大陸』の中でも、最強を誇る少数精鋭の部隊らしい。

という事は、あの集団がそう云う事だろうか……？

「では——ガフォーク？ヴェルヴェック様はその中でナイト？オブ？騎士の中の騎士ナイトで在らせられます」

ナイト？オブ？ナイト騎士の中の騎士 は筆頭騎士。この国で最強の騎士に与えられる称号。

つまりは、この大陸でも最強クラスの人物だと云う事だ。

そう考えれば、あのレベルの装備をしていても納得がいく。

あれは王から贈与された、聖剣クラスの武具だったんだろう……。

しかし、長身二枚目でこの世界でも最強クラスって……俺の劣等感がジクジクと刺激された。

あんだだけイケメンだとさぞモテるんだろう……死ねばいいのに。

なんだよ、そんな人物が居るんならそいつに魔王退治頼めよな……。

……
そんな風に俺はやさぐれているが、セイナーレは気が付いていないのか説明を続けていた。

「今まで遠征されておりましたが、間も無く建国記念祭ともなり、その為帰還されたかと思えます」

なるほど、だから今まで見かけなかったのか、年に一回記念祭——
—そんな一大イベントに、それが国を代表する騎士ともなれば、召集されもするか……。

——しかし、今までは城に居なかったので、特に害が無いと思いはつといたが、これは逃げ出す際に面倒臭くなりそうだな……。

俺はそんな考えをおくびにも出さず、セイナーレに礼を言つと立ち去った。

「……そうか、わかった。ありがとう」

「いえ」

俺は祭りの騒ぎに生じて、逃げ出そうと考えていたんだが、万が一阻まれたら如何するべきだろうか？俺達はこれから、この国に喧嘩を売るのだ。

……そう、勇者召喚など愚かしい事をした事を、奴らに後悔させてやるのだ。

——あと三日しかない。

第十一話 俺自重。

建国記念祭当日、空が白みかけ城下街は既に賑わっていた。今も外から賑やかな声が、ここまで聞こえてきている。

俺はふと、左手首に巻いている腕時計を見て確認した。

— 06:47 —

そろそろ、セイナールが俺を呼びに来る頃だろう。念の為に雪緒と絆は、鞆を預けて何処でもドアで街の方に逃げてもらっている。今までの暗躍の中で、二人の説得が一番大変だった……。

もの凄いごねられた。寧ろあの時、精神的に死ぬかと思ったよ……。

特に絆はヤバイ、マジヤバイ。

—— 魔術を詳しく教えてもないのに、俺に催眠の魔術を掛けてきた。絆には俺の体質？ を説明していなかったので、俺の魔術抵抗^{スト}力があつたから効かなかったが、万が一効いていた場合には、何をしていたんだあの娘は？

ともかく二人には、俺が何でも一つ願いを叶えると云う条件で、何とか納得してもらった。まあ、あの二人だし、そこまで凄い事は要求してはこないだろう。

トントン

考えに耽っていると、部屋の扉を叩く音が聞こえた。

「勇者様。お呼びに参りました」

予想通りセイナーレが、俺を呼びに来たようだ。

「——ああ」

俺が返答すると、セイナーレは扉を開け部屋に這入ってきた。

「勇者様。そろそろお時間となります」

そう言つとセイナーレは、俺の部屋を見回した。

「他のお二方は、こちらにいらつしやらないのですか？」

セイナーレは、既に雪緒の部屋に向かったのだろう。雪緒と絆は一緒に部屋で暮らしていたのだが、部屋に居ない場合には大概俺の部屋に来ていた。なので、二人が居ないのが不思議だったのだろう。俺はその疑問に素直にセイナーレに答えた。

「……ああ、二人は既に逃げて貰っている」

「そ……そうですか……」

セイナーレは驚きはしていたが、そこまで大きな反応では無かった。

「余り驚かないんだな？」

「……そんなことはありません」

もしかしたら、薄々気が付いていたのだろう、何せ俺たちに、こ

の世界で一番接してる人間だ。

「……そうか。で、伝えに行かなくていいのか？」

「私では、勇者様にはとても、敵いそうにはありませんから」

俺はふと思いついた事を訊いてみた。

「なあ、暫くこの部屋に留まっていてくれないかな？」

彼女は不思議そうな表情を浮かべていた。

「……どういうことでしょうか？」

「この国には恨みがあるが、仕事とはいえ、セイナーレには世話になった事は事実出しな、その礼みたいなものだ……」

仕事とはいえ、俺たち三人はセイナーレに一番世話になったのだ。
……これも甘い考えなのかもな。

「そうだな、言い訳がたつように、ここの部屋の扉を魔術で一時的に封印しておこうか」

俺は、何も云わず押し黙ったセイナーレを無視して、部屋を出て扉に封印の魔術を掛けておいた。昼過ぎ位には解けるようにしておいたが、魔術師でもない彼女が出る事は暫く無理だろう。

……これは彼女への礼と言うよりも、俺のエゴだろうな。俺は苦笑いを浮かべながら、謁見の間に向かった。

謁見の間にたどり着くと、扉の前には二人衛兵が立っていたが、俺を止めるような事は無かった。俺は衛兵を気にせず扉を開けると――居るわ居るわ、この国の有力貴族共が。

流石は年に一度の最大行事、さらに勇者公開も相まって、この城から離れた領地の貴族も集まって来ているのだらう。

更に、見たことあるような、無いような騎士やら魔術師たちもワラワラと並んでいる。この場所に立って居るって事は、それなりの地位にいる人間だらう。

奥の方には、忌々しい王様と宰相、その横に長身瘦躯のイケメン、ガフォークが立っている。壮観な光景だ。つまり今ここに、この国の重要人物が集結しているのだ。

――笑いが込み上げてくる。こうまで予想通りになるとは。俺は込み上げる笑いを噛み殺しながら、扉にコッソリと魔術を仕込み、王の前に進んでいった。

周囲は、俺の事を怪訝そうに見つめながら、コソコソと「アレが勇者か」等の会話が聞こえてきた。だが、こちらも俺の行動を止める人間はいない。恐らく《隷属の魔術》を信じきっているのだらう、俺達には手を出せないと。王族の命令には絶対遵守らしいしな。

……いや、寧ろ自分達に手を出してくるなど、考えてすら居ないのかもしれないな。

俺は王の前に立つと、恭しくお辞儀をした。

「麗しく国王陛下。この度は私に^{わたくし}このような場を用意していただけるとは」

俺は皮肉の心算で、エセ敬語の言葉を言った。王は訝しげな表情を浮かべながら、俺に訊いてきた。

「……あとの二人の勇者は如何した？」

嗚呼——やっぱり聞いてくるよね。俺はその問いに、素直に答えた。

「はい。既にお二方は私が逃がして下ります」

「——なにっ!？」

王様は、引きつった表情を浮かべた。

「ど、どういうことだ! おい! こやつ等呼びに行った侍女はどうした!？」

王は周囲に怒鳴り散らすように言っている。

「セイナーレ……侍女でしたら、私の部屋にて拘束させて頂いております」

「——なっ!」

王は俺の言葉を聞き、絶句している……。しかし、気を取り直したのか、俺に向かって言った。

「ふ、ふん——そうだな、だったらお前から問い質せばいいのだ」

ふむ、俺に《隷属の魔術》を発動させる心算なのだろう。

『この者を、愚かなる者に鉄槌を』

へえー？　それが発動きつかけなのか。俺は関心しながらも無反応でいると、平然としている俺を見て、傲慢そうな王の顔は、焦りで歪んでいた。

「ど、どういうことだ！？　『この者に鉄槌を！』」

人の焦った顔って愉快だよな。それが尚の事嫌いな人間なら。込み上げる笑みを噛み殺しながら、俺は親切に教えてあげた。

「無駄ですよ国王陛下。私には魔術は通用いたしません」

まあ、魔術無効なんて、信じられる物ではないだろうけどな。

「なにを莫迦げた事を！　『鉄槌を！』」

もの凄く間抜けだな。笑いを超えて呆れてくるよ。

「——グッ。ガフオーク！　こやつを拘束しろ」

「ハッ！」

王はガフォークに命令して、俺に差し向けてきた。……おいおい、結局力づくですか。高が知れてるね。

俺は事前に自分に掛けておいた強化魔術のお蔭で、バックステッブ一つで難なく、掴みかかった手をかわした。

事前情報で、俺の事はたいした事無いって聞いていたんだろうな、嘗めきっていたガフォークの動きは、然程たいした事無かった。

「——なっ!？」

「ダメですよ。格下と誤っている相手でも本気出さなきゃ」

ガフォークは傲慢そうな顔してるし……って、これは俺の考えか？イケメンむかつく、イケメンむかつく、イケメン死ぬ。氏ねじゃなくて死ぬ。

「言うじゃないですか。獅子は兎を狩るにも崖に落ちるって……あれ？　なんか違ったっけ？」

俺の煽りに、ガフォークは顔を歪めていた。見下していた相手に見下されるって、さぞ不愉快だろう。

「な、なめるなっ!」

おお！　腰に佩いていた剣を引き抜きましたよ。流石は《騎士ナイトの中の騎士》こんな場所でも帯剣が許されてるんだな。

しかしこの場で、無手の相手に抜刀するってのは、立場的にどうなんでしょうね？

それにしても、怒りに歪んだイケメンの表情って最高ですね。そ

んな益体も無い事を考えていると、切りかかってきた。……おいおい、俺を切り殺す心算かよ。まったくそんなに精神弱くって、よくその立場にいられるよな。

ガキッン！

金属が碎ける音が響いた。

「——はあ？」

そんな間拔けな科白を吐いたのは、ガフオークだった。俺はただ今上半身——金属化しております。《無詠唱》による魔術、肉体の一部分を鋼鉄化させる魔術。現在俺の上半身は、オリハルコンより硬くなっておりますよ。

かの有名なお方は仰りました。『かわせないなら、受け止めれば良いじゃない』

ありがとう、どこぞのマリーさん。

俺はいくら肉体強化したとはいえ、大陸最強と言われるガフオークにまともに殺り合えば、現状勝てるわけが無いだろう。だったら勝てなくても、負けなければいい。

まあ暗殺とかだったら、余裕で殺せると思うけどね。ただ暗殺で死ぬなんて、つまらない結果を俺は求めちゃいない。

そこで、勝てなくとも負けないと云う手段をとる為に、俺は硬化——所謂アートルンを思いついた。ただこれ、硬度と比例して重量も増すので、まともに動く事も叶いません。実戦じゃまともに使う事が出来ないな。そこまで似なくても良かったんだけどね。……っ

て、あれ？　これだったら、全身硬化しても一緒では無かったじゃないか。

ともかくお蔭で、ガフォークの聖剣は、彼自身の膂力と俺の硬度差があり過ぎた為——見事に砕け散りました。

ああ、もつたいない。日本人ならこの精神『M O T T A I N A I』あとで回収できるのなら、回収したいな……。

そんなどうでもいいことを、どうでも良くなさそうな真面目な表情で、俺が黙考していると。

「——な、なにをした!？」

ガフォークは、困惑した表情を浮かべ、折れた剣先を見つめながら訊ねてきた。

「いや、なにって、俺の体の一部を硬くしたんだよ」

……あれ？　なにこれ、勘違いされそうなイヤらしい科白が出てきたぞ。体の一部が硬くって……おいおい自重しろ、俺自重。

俺の答えが気に入らなかったのか、ガフォークは怒りで顔を真っ赤にして、俺に食って掛かてきた。

「ふざけるなっ！　これは陛下から授かった聖剣だぞ！」

ああ、やっぱり聖剣でしたか。うん、後で回収しておこう。

「あー、そうでしたか。それは大変ですねー」

「き、貴様っ！　嘗めているのか!？」

更に顔を赤くして俺に怒鳴ってきた……だんだん相手をするのが面倒臭くなってきたな。俺のイケメン嫌いも相当なものですね。

さて、そろそろ、計画を実行に移すとしますか。俺は周囲に聴こえる様に、大声で言った。

「初めまして皆様、私は今代の勇者として、召喚されました雪村遥と申します。ただ、私……いえ私達は望んでこの地に居りません。なので、我々は勇者としての立場は放棄させて頂きます」

突然の俺の言葉に、周囲に居る全員が声を失っていた。理解し切れていない人間が多いのだろう。俺はそれを気にも留めずに、言葉続けた。

「それ故に今後、私の様な存在が出ないよう、処置させて頂きます」

パチン！

俺は大げさに指を鳴らした。すると城の各所でゴゴゴツと、地響きのような音と振動が襲ってきた。

城の各所に仕込んだ、《次元の消失ディメンション・ゼロ》を発動させた。いきなり空間が消失するのだ、失った空間が自重に耐え切れず崩れたのだろう。その際もしかしたら、巻き込まれた人間もいるかもしれないけど、そんなん知らんがな。

一応俺の部屋は今まで、念の為に強化魔術を仕掛けていたので、セイナーレは安全だろう。

俺はこの為に三日間も、指を鳴らす練習したものだ。実際は鳴らさずに発動させる事は出来ただけだ。まあ様式美って重要だし、なにより『カスッ』なんて失敗したら目にも当てられない。

……想像したらみつともなくてゾツとするな。うん、上手く出来てよかった。

ちなみに、ここまで騒ぎを起こしても、誰も謁見の間に駆け込んで来ないのは、這入る時に扉を俺が封印しておいたからだ。

「ああそうだ、それと、この近隣に居住区を持つ貴族様方には、私共の旅立ち資金として、資産を頂きましたから」

うん、この場に居る大半の貴族が、一文無しとなるのだ。まあ屋敷とか土地は残してるから勘弁してね。俺の言葉を聞くと、先程まで絶句していた貴族達は青くなっていた。平然としている者も居たが、それはここから離れた領地の人間なんだろう。静けさから戻ると、俺を轟々と批難してきた。

……貴族って奴は、わかりやすいな。先程まで傍観に徹していた連中が、今も俺に掴みかかってこようとしている。周囲の騎士や魔術師も命令されたのか、拘束しようと襲い掛かってきた。俺はそれを無視して言葉を紡いだ。

「それでは申し訳ないと思い、私からはこちらを皆様に用意いたしました」

男も、女も、若かろうが、老いていようが、騎士だろうが、魔術師だろうが、貴族だろうが、王族だろうが、それが侍女であろうが、ここに居るだけで皆等しく俺の敵だ！。

態々これを使う為にこの日まで、この糞な国に留まっていたのだ。皆様、俺の手の上で踊ってください。

——さあ、仕上げだ。

パーンッ！

俺は手を振り上げると、胸の前で拍手かしわでを打った。

「……がああああああああ！！！！」

俺を除いた全員が、叫び、苦しみ、しゃがみこんだ。味わった痛みは相当な物だろう。なんせ俺がそう設定したし。

皆、突然の激痛で、まともに立ち上がる事すら叶わないようだった。

「……な……なにを……した」

この中で一番痛みに強かったのか、這いずりながらもガフオークが、息絶え絶えで訊ねてきた。ていうか、同じ様な科白何回いったコイツ？

俺はその問いに、全員に聴こえる様に答えた。

「はい。皆様に差し上げたのは、『永久なる隷従』と云う、私が生み出した呪いです。効果としては、皆様をご存知の『隷属の魔術』の強化版だと思ってくれて構いません。つまりは皆様に、その呪いを行使したと言う事です。

皆様ならこの意味……わかりますよね？」

これは、解除の方法を探っている時に、解除の方法はわからなかったが、扱う方法だけならすぐにわかったので、何かに使えると思い改良していた、呪いと云う名の魔術。

これの唯一にして最大の欠点は、掛け捨てで、俺でも解除出来ない

いつて事。絆だつたらもしかしたら……多分……恐らく……きつと、解除できるかな？

あと、これも発動させるのに、態々拍手なんて打つ必要なんか無いんだけどね。発動するってわかり易くする為に、敢えて行いました。

俺の言葉を聞いても、特に反応は無かった……反応すら出来ないほど弱っているのだろう。

「これはお願いでは無く警告です。今後私達に関わらない事を誓つて下さい。そうして頂ければ、私達も関与いたしません。

まあ、誓わなくても結構ですけど、その際はわかってますよね？」

俺は周囲の目を無視して、王の方に向かっていくが。ガフオークも、そして周囲の人間も、息絶え絶えで俺を止めに入るような事は無かった。いや、まともに動く事すら叶わないのだろう。

俺は前に立つと、椅子の中で蹲っている王に向けて問うた。

「では国王陛下。誓って頂けますか」

「……………」

王は押し黙って答えなかった。俺はそんな事を気にせず、ニッコリ笑みを浮かべ再び訊ねた。ただし、目は笑っていない。

「誓って頂けますね？」

「……………」

「ふむ——では仕方が無いですね」

そう言つと俺は、再び拍手を叩こうと両手を振り上げると。王は慌てた様子で答えた。

「わ、わかった！ わかったから、それだけは止めてくれ！」

言質は取れた。それを聞いた俺は、周囲に聴こえるように声を張りながら言つた。

「ありがとうございます。皆様も国王陛下のお言葉を聞きしましたね……ああそれから、約束を違えた時には、先程の倍の痛みが襲いますから——この部屋に居る全員に」

俺の言葉を聞き、辺りに居る人たちはビクツと震えた。

「王の責任は民の責任ですから、流石に何も知らない一般市民に味合わせるのは酷ですが、せめてここに居る人たちには、連帯責任として味わつて貰わないと。ここに居る皆様、先程以上の痛みを味わいたく無いのでしたら、是非そうならない様、国王陛下を止めてあげてください」

ここに居る人間は、俺の暴論とも言える科白を聞きながら、手を出すことも叶わないので、怯えた目で俺を見つめるだけだった。先程の呪いを味わないためにも、ここに居る全員が必死で止めに来るだろう。ここに居るのは、この国を占めている貴族どもだ、王といえど無視なぞできる筈も無い。

因果応報と云うものだ、ただ殺すなんて、そんな楽かつ心優しい事なぞしない。そう俺は、約束を守る心算など——ない。

定期的に、あるいは突然に、呪いの力を発動させてやる心算だ。

痛みに、恐怖に、そして何時来るかわからない死に、怯えて暮らしていくがいい。

さらに今まであつた金ちからを奪ってやった。金が無くなれば、誰も寄って来なくなるかもしれない。尚の事、兵や侍女など雇えやしまい。国民から無理な徴収などすれば、人は離れていく。そうなれば国は崩壊するしかない。今までのような生活は出来なくなるだろう。金が無い者の苦しみも味わえ。

そして、勇者を召喚しましたが逃げられました……いいねいいね。ここまで来てそれは大恥だ。仮にも神光国家を名乗っているんだ、その様な国が勇者に裏切られ逃亡されました。国としても権威を問われるだろう。神光国家の名折れもいいところだ。他国に対して示威行為のため、既に勇者召喚を大々的に公表だっている……その結果がこれだよ。権威失墜。最高ですね。

ああ、あとそうだな。この前入手した書類を、やっぱり他国に流すのもありだな。売って面倒ごとになるくらいだったら、匿名で流したっていい。

この国がどうなろうと知った事じゃない、寧ろこれから苦しむ様子を想像すると、愉快でしょうがない。よく言う『人の不幸は蜜の味』、それがこの国の人間なら尚最高だ。

愉悦に歪んだ笑みを隠しながら俺は言った。

「それでは皆様、もうお会いする事は無いでしょうが、ご健勝で」

そうだ、簡単に死んでなんかくれるな、出来る限り長く生きて苦しんでください。

そう言い俺は、這入ってきた時と同じ様に恭しくお辞儀をすると、

再び拍手を打ち《光学迷彩》^{インビジブル}を使用した。これから起こる生き地獄の始まりとして、消える前に再び呪いを発動させてやった。

どこかの莫迦が血迷って、追ってくる可能性を考えて消えてみたが、これは正解だったかな？手の内を晒すのは余り好きではないけど、これで更に俺を警戒してくるだろう。

というか、あの激痛の中で俺が消えていくのを、確認できた人がどれだけ居るのか。

窓に向かう途中に周囲を見渡してみたが——全員昏倒して倒れこんでいるようだ。身じろぎ一つあげる人は居なかった……あれ？やりすぎですか？ 気絶なんかしたら意味無いじゃん。

俺は、気絶しないギリギリの力の加減を考えながら、窓から外に飛び出した。

…… あっ！ 聖剣の破片回収するの忘れた！

俺は無駄にカッコつけていて、すっかり忘れたしまった事を、一日後悔する破目になってしまった……。

第十一話 俺自重。（後書き）

ここまでは、第一章の召喚編となります。

今後の展開を考え、敢えて殺さずで書いてみました。

名前付きのキャラは、今後もしかしたら出てくるかもしれません。

勢いと思いつきで書いてきたので、矛盾やら色々と統合性の無い作品になってしまい。

それでも、ここまで読んで下さって、ありがとうございました。

次からの第二章が、一応の本編である冒険編となります。

もし宜しければ、今後も付き合ってやってください。

第一話 欲しがりません勝つまでは！（前書き）

漸く新章に入れました。

プロットは出来ているのに全然進まない……。

毎日及び短期間で更新出来る人は尊敬します。

第一話 欲しがりません勝つまでは！

俺達はアレからすぐに合流したあと、国を出る事にした。

少なくとも国に留まっても、害になることはあっても、利に成るようなことは無いだろうから。なるべく面倒事になる要素を減らしておこうかと考えたからだ。

旅に必要な物は事前に俺が、思いつく限りの物を買って鞆の方に仕舞っていたので、すぐに街を出立できた。

まあ、なにか必要な物が発生したら、何処でもドアで戻る事も出来るし……って、あれ？ よく考えたら、ある程度進んだら街に戻って宿屋に泊まるって方法もあったな……うん、考えない事にしよう、今後何かあるかわからないし、何事も経験だ。べ、べつに買ったものが、勿体無いとかでは無いんだからね！ そこんとこ間違えないでよ！ ……フ、フン。

「という訳で、俺達は野営の真っ最中でしたー」

「……お兄ちゃん。だれにいつてるの？」

ヤバイ、俺の独り言バツチリ聞かれました。なんとか誤魔化さなくては……。

「ちゃ、ちゃうねん！ ワテはお茶の間の皆様に向けて、発信してただけやねん」

……正直に言っちゃった！ どこが誤魔化してんねん。

「そうなんだー」

あれ？ あれで納得してくれたよ。素直すぎるのもお兄さん心配になるな。

ともかく俺は氣をとり直して、周囲を見渡した。ここは プレクスタ より半日程北に歩き進んだ、街道外れの森の側で野営をしていた。

すでに辺りは日が落ち、焚き火の炎だけが明かりとなっていた。

ちなみに、火をつけることに關して言えば、三人ともこの世界で云えば魔術反則^{チート}なので、簡単につけることができ、そう言った問題で悩む事など無かった。

追跡の可能性を考えても、街道を堂々と行くのは……と最初は考えたが、土地勘が無い俺達が森なので迷い込んで困るので、そう言ったものを差し引いても、安全を考え街道を進むことにした。

強い魔物なんかと出会うよりは、まだ人の方の対応が俺にとって
は楽だったし……俺はギルドの依頼で外には出た事があったが、雪
緒や絆は外に出るのも初めてなら、魔物を見るのも初めてになっ
てしまうので、色々考慮した。

ちなみにここまで魔物に出会う事は無かった。いや、違うか、俺
が出会わないようにしていた——俺が事前に開発し編み出した遠視
魔術で、進路上の魔物を排除していたからだ。サーチアンドデスト
ロイ。

チヨット過保護すぎるかとも思わなくも無いが、何も無いのが一
番いいからね。

流石にこの時間になると、街道に行き来している者はいなかった
——建国記念祭当日という事で、昼間歩いている時は、結構な人が

行きかっていたが、魔物は大概が夜行性ってことで、皆安全策を取って野営しているのだろう。

建国記念祭——アレからどうなったかは知らない……今回の祭りのメインイベントだった勇者のお披露目は、当人だった俺達が逃亡した事でご破算になっただろうし、王族など国の代表共も俺が気絶させてしまったので、それ所では無くなってしまっただろうな……まあ、俺が気にする事ではないか。

ともかく今は、雪緒が料理の真っ最中です。俺もある程度なら出来なくは無いので、手伝おうと申し出たが、やんわりと断られた。なんでも、乙女の戦場らしい……うん、戦場なら仕方ないな。

今作っているのはクリームシチューみたいだった。俺の所まで牛乳の甘い香りが漂ってきている。

材料や調理道具自体は先程も言ったが、鞆の中に放り込んでいたので、大概の料理は作る事が出来るだろう。

この世界では、食べ物自体は元の世界と幸いな事に似通っていた。ただ、形や大きさ色などは違う物も多かったが、牛乳も味自体は牛乳そっくりだったが、牛の乳なのかはわからない……知らないって事も幸せだろうから。

ともかく○次元鞆——は、保存の利くものから、保存の利かなそうな食材様々がしこたま買い込み放り込んだ。

保存の利かないものは、最初は買うのを控えようかと思っていたが、城に居る時に色々試した結果——鞆に入れておくと全く劣化しない事がわかった。

理由？ 理論？ そんな物は知らない！ 便利だって事で俺は納得しておいた。まったく自分で作っておきながら、ブラックボックスな部分が多いけどね……。

謎が多いほうがいいんだよ。……ふふ、ミステリアスな俺に惹か

れるだろう。

調理道具は、フライパンや雪平なべ等、日本で存在した物で売っていなかった物は、武器と同じ様に俺が作った。これは日本で実際に使っていたので簡単に作れたが、テフロン加工なんて物は詳しく知らないの、魔術でくつつかない様に適当に加工しておいた。

多分これ売りに出せば、一攫千金を狙えるかも知れないな……いや、まあいいか、金なら腐るほど持つてるし。

雪緒は鼻歌を歌いながら、鍋をかき混ぜていた……って、あれ？ 女の子の手料理って初めてじゃないか俺？

や、やだあ、ドキがムネムネしてきたわ。

と。益体も無い事を考えていると、横から俺を呼ぶ声が聞こえた。

「——かくん、遙くん。ご飯できたからそろそろ食事にしよ」

おおっと。俺が妄想の海にトリップしている間に、料理は完成していたようだ。

「ああ。わかった」

俺は返事を返すと、雪緒と絆が居る焚き火に向かい、食事にすることにした。

「はい。どうぞ」

そう言われて、俺は雪緒から器を受け取った。器に注がれたクリームの中に、真っ赤なジャガイモもどきに青い人参もどき、玉葱は玉葱のままで鶏肉によく似た、淡泊な味の肉が入っていた。

野菜はともかく、肉は何の肉かはわからなかったが、わかってしまったら今後食べれなくなってしまいそうだったので、敢えて目を瞑った。知らぬが仏。

「どう……ですか？」

雪緒は不安そうに、俺達に味を訊いてきた。

「——うん。うまい」

「ゆきおおねえちゃん。おいしいよ」

俺と絆が答えると、それを聞き雪緒は安堵の表情を浮かべていた。

「そう……ですか。よかった……」

この際にパンも欲しくなったが我慢した……贅沢は敵！ 欲しがりません勝つまでは！ ただ買うのを忘れただけなんですけどねー。明日の早朝にでも街に戻って買ってこよう……。

うむ、料理は美味しゅうございました。眉目秀丽、容姿端麗、さらには才色兼備で武道にも精通している……さすが雪緒さんは穴がないなー。

雪緒も絆も粗方食べ終わったみたいなので、今後の方針を話し合っておこうと思い、言葉を切り出した。

「……さてと、で、今後の事を話そうかと思うんだけど」

「今後のこと……ですか？」

雪緒は首を傾げながら、俺に訊いてきた。絆に関して言えば、食事が終わると俺の胡坐あぐらをかいた上に座ってきていた。その際に雪緒にひと睨みされた事を忘れてはいけない……。

「ああ、城を出る時に話したけど、これからの方針をね」

絆は俺達の会話に興味が無いのか、鞆から俺の携帯を取り出し、胡坐の上でアプリのテ○リスをピコピコとプレイしていた。

「一応先にも言ったけど、俺達がこれから向かおうと思っているのは、魔術都市マクストを目指す事を考えている。もしかすればここなら、元の世界に帰る方法の情報があるかも知れない……。ただここは、神光国家プレクスタからはかなり離れているので、まずは中継として北にある、自由都市に向かおうと思うけどいいかな」

俺は元の世界に帰る方法を考えてみた……。少なくとも、俺達を召喚したあの国ではその様な情報は無かった。だとすれば——と、考えた。あの召喚で使用されたのは魔法陣、それならば魔術都市と呼ばれる場所のなら、帰る方法がわかるかもしれないと考えたのだ。可能性……。でしかないのだけど。

それにこれから、向かおうと考えている自由都市——は、中立都市なので俺達が向かうにも都合が良さそうだろうから。

「はい。わたしは詳しい事はわからないので、遥くんにおまかせします」

「ああ、ありがとう。それで聞いた……。と云うか調べた情報だと自由都市までは、まだここから歩いて一週間ぐらいかかると思う」

この世界では車や電車、飛行機などは存在しないので、おもな移動手段としては徒歩、或いは馬、馬車などである。まあ魔物が跋扈しているのに路線など引ける訳も無く、飛行機など存在しても空とぶ魔物の格好の餌食だろう。

しかし遠いな……しかも、わかったのは距離ではなく、徒歩だと大体何日かかるって情報なのだ。この世界にはキロとかマイルとか、長距離を図る単位が無いらしい。抽象過ぎてわかりづらい……せめて何キロかわかればペース配分も考えられるのにな。

「……遠いんですね」

「ああ、ほんとにな……」

次の 自由都市 では馬車一式ぐらいは、買い揃えようと俺は心に決めた。

第一話 欲しがりません勝つまでは！（後書き）

文章が冗長気味に……話も殆んど進まず、私に文才があれば、もっと綺麗に纏められたのですが。

第二話（前書き）

今回サブタイが思い浮かばなかった……

第二話

自由都市 に向かい始め、半分の道程が経過した……。

街道を真つ直ぐ進んでいるだけあって、特に問題も無くここまで歩いてはこられた。

少なくとも俺達を追ってきている存在は、特に確認は出来なかった——向こうは今、それどころではないだろうが、それを信じて樂觀視できるほど悠長にも構えてはいない。

例えば俺は、定期的に魔術で周囲を確認したり、思いつきに呪いを発動させたりしていた……まあ、呪いは俺の憂さ晴らしも兼ねているかも知れないが。

ともかく、そう言った問題は無かったが、違う問題が発生した。

「遙くん。お願いします!」

「お兄ちゃん。絆からもお願い……!」

——それは、お風呂である。俺達は城に居た時には、毎日では無いとはいえ、風呂に入ることは許されていた。

なんでも、この世界では風呂は貴族や王族など、裕福や高位の存在でしか入らないものらしい、俺達は 隷属の魔術 を掛けられてはいたが、一応の勇者の扱いとして風呂に入ることが出来てはいたのだ。

大概の人は、濡らした布で体を拭く程度で、俺達もここまではそうして来たが、日がな一日歩いており、更に日中は日差しが暑くて汗もかいているので、男の俺はともかく雪緒や絆は、流石に耐え切れなくなってきた。

此方の世界の住人だったら、それが当たり前なのかも知れないが、俺達日本人は毎日お風呂に入っていた。場合によっては汗をかく度にシャワーを浴びたりもしていたが。そういった環境に慣れきっている俺達には、この状況はかなり酷だろう。

といった切なる二人の要望により、俺が風呂を作る事になった。

まあ俺も風呂には入りたかったので、このお願いは吝かでは無かったが。

「……わ、わかったから、チョット抑えて抑えて」

俺達は余り目立たないよう、街道の外れに立っている。そこで俺は、二人に迫られるように頼みこまれていた。

二人とも今にも襲ってこんばかりに、鼻息荒く目が血走っている……うう、怖いよう。

「チョット今から創るから、待ってて」

ふいー、ふいーと、息荒く俺を見詰めて来ている——ヤバイ、創らなければ殺られる。

俺は恐怖に慄きながらも、材料となりそうなものを鞆から探った。

浴槽を創るならステンレスか……だとすれば鉄とニッケルにクロムが要るが。ニッケルにクロムなんて物は持っていないし、更に言えば鉄も、材料に成る程量を持つてはいない……手持ちの素材で代用して、魔術加工するしかないだろう。

俺は鞆の中からミスリルを取り出した。鞆の中身の金属は、殆どが希少金属であり、その中でも最も量持っているのがミスリルだった……。

「鉄を街まで買いに——いや、今ここを離れようとしたら殺^やられる……はあ、まあいいか、使う予定は特に無かったし——しかし、これを売りに出したりしたら幾らになるんだろうな……？」

二人を一瞥して見ると、とてもではないが、今から街に買い物に行くのは無理だと判断した。仕方無しに俺はボソリと呟きながら、このまま創る事にした。

ゴツソリと鞆からミスリルの金属塊^{インゴット}を取り出すと、武器を創った時のように魔力を通し始めた。すると次第に輝きだし——四方メートル程の浴槽に変化していった。

日本に居た時の実家の浴槽をイメージしたので、それなりに大きな浴槽が完成した。

脱衣と周囲の目隠しの為の囲いは、テントで代用すればいいだろう。そう考え鞆からテントを取り出し組み立てると、先程創ったばかりの浴槽を魔術で浮かせ中まで運んだ。ちなみに浴槽を浮かせた魔術は、財宝を盗む際に終盤に編み出した物だ、最初からあれば、もっと盗むのも楽だったんだろうな……。

ともかく俺は、横にいる二人の期待とプレッシャーに耐えながら、次にお湯を張る事にした。

流石に日本に居たときでも、熱湯を出す魔術の類を、アニメやゲームで見たことが無かったので、熱湯を出すという魔術上手くイメージは出来なかった、なので水を張り直接火で温めることにした。俺は浴槽に狙いを定め水を注ぎ込むと、次に浴槽自体に熱を送り込んだ。

幾らなんでも浴槽の水の中に、炎の魔術を叩き込むのは避けておいた……水蒸気爆発怖い。それに今回使用したのは、魔力伝導率が

鉄とは比べ物にはならない程高いミスリルである。こういった方法が一番最適であろう。

すると然程時間がただずに、浴槽から湯気が漂ってきた。

俺は湯船の温度を確かめようと、浴槽に手をかけると……。

「わちゃあああああああああああああああああああ！
！……！」

拳法家よろしく悲鳴をあげた——俺は莫迦か？ もの凄く熱くなっていた浴槽に触って、おもいつきり火傷した。手の皮べろーん。

「……え？ は、遙くん？」

「……お、お兄ちゃん？」

二人とも俺の様相にビックリしていた。まあ、あんな大声を出して驚かない方が無理だろう。俺は手を隠すようにして、火傷部分に治癒魔術をかけた後、安心させるように笑いながら答えた。

「ちょっと驚いただけだから、大丈夫大丈夫」

俺が火傷していた方の手を、ひらひらと振りながら言つと、それを聞いて一応は納得してくれたのか下がってくれた。

——ふう。俺は気を取り直すと浴槽の部分を冷却させ、湯船に手をつつまみかき混ぜながら温度を確認した。

「……うん。温度はいい感じだな——よっし、風呂は完成だ」

俺が雪緒と絆に呼びかけるように言うと、二人は目を輝かせながら此方に寄ってきた。

「——ほ、本当ですか？」

「やったあ！お風呂だ」

「ああ、ただチョットまだ熱いかも知らないから、水でも足して調整してみて」

二人とも水の簡易魔術程度なら扱えるので、特に問題にならないだろう。

「じゃあ俺は、外で周囲を監視しているからゆっくり入っておいで」

今にもウズウズとして、お風呂に入りたそうにしている二人に鞆を預けると、俺はテントから外に出て行った。

しかしまさか、ミスリルで浴槽を創る事になるとは……まさにフアンタジーだな。

「じゃあ、絆ちゃん。一緒に入りましょう」

「うん！」

などとテントの中から会話が聞こえてきたが、俺は聞こえない振りに徹して、周囲を警戒した。

流石の俺も、雪緒と絆の入浴を覗く気は起きなかったし、会話を

盗み聞く心算も無かった。試してはいないが、俺の《光学迷彩》^{インビジブル}が彼女達能力の一《危機感知》^{アビリティ}を上回るかわからないし、だからといってそれを試す気にはならなかった。というか怖くて出来ません。

ともかく俺は周囲を警戒するよう、辺りに生物がいればわかる様に、探知の心算で《魔術感知》と併用して魔力を飛ばしてみた。これで生きている生物がいれば、何かしら魔力の歪みを感じるだろう。それを辺りに放っていると、森の奥のほうから、何かの生き物の反応が返ってきた……。

「ん？ 生きているモノにしては反応が小さいな……？」

反応の見たサイズの大きさからして、成人男性ほどの大きさでは無いだろうが、生きた生物の反応を感じた。ただ力の反応としては、かなり弱弱しく感じた……。

周囲は既に薄暗くなっており、更に森の中なので遠視の魔術でも木々などが邪魔で奥までは確認できない。

「んー、何なんだ？ まさか子供……じゃないだろうな？」

魔物が潜んでいるかもしれない森の奥で、子供がいるとは余り考えられないが、ただ感じるサイズの大きさからしては、可能性として十分にありえた。

俺は少し気にはなったが、嫌な感じと共に面倒事の可能性もある。ともかく今はここを離れる事が出来ないの、確認に行くかどうかは、二人が風呂から上がったからだ……。

第三話

「お兄ちゃん。どっちー？」

絆は俺の手を引っ張りながら、無邪気そうに訊ねてきた。

俺は風呂から上がった雪緒と絆に、魔術での探知の件の事を話してみると、案の定確認に行く事になった。

厄介事の可能性もあるとは俺は伝えたが、興味の方が上回ったらしい。いや、興味と云うより人として心配なのかも知れないが——可能性とは云え、もしかしたら人の子供かも知れないなどと、迂闊にも言ってしまったから。

まあ、俺も気にはなっていたので、余り否定意見を言わなかったかもしれないが……好奇心は猫をも殺す。

ともかくそうにはならないように、俺は周囲を用心しながら進んでいる。

移動する際には浴槽はお湯を捨てて、テントと一緒に鞆に収納している——俺も風呂に入りたかったんだけど、後にすることになった……まあ浴槽は、鞆のお蔭で持ち運びできるし、お湯を入れることと自体は俺にとっては然程問題では無から、後でゆっくり入ることにしよう。

今は森の中を進んでいるのだが、既に周囲は夜で闇に落ち、森の中は木々の葉に空を覆い尽くされており、月明かりすら届かないので真っ暗で、まともに前を進むことすら叶わなかったが、幸いな事に俺が元の世界から持ち込んできていた物に、LEDライトがあっ

た。これは携帯電話用に充電器として使ってきた物だが、本来の用途として使う機会が来た。

魔術で明かりを灯す事も出来たが、森に巣くう魔物達は大概が夜行性であり、俺の魔術は強力すぎる為目立ちやすいので、折角ライトがあるのだから魔術を使うのは避けておいた。あるものを有効活用しないとね。

俺は右手にライトを持ち、左手には絆と手をつないだ状態で歩いており、雪緒は俺のすぐ後ろで刀を持って周囲を警戒していた——
こう云う時にこそ二人の能力、^{アビリティ}一《危機感知》が効果を発揮するの
かも知れないな……ただそれに頼り切るというのも俺の柄ではない
が。

「……遙くん。その場所って云うのはまだでしょうか？」

雪緒は周囲を見回しながら、俺に訊ねてきた。思っていた以上に森の中が暗いので、もしかしたら怖いのもかもしれない。

「ああ、もう少し先だな」

「……そう、ですか」

雪緒は俺の答えに、息を吐くように言った……。

「あれー？　もしかして雪緒おねーちゃん……コワイの？」

「——ムッ。そんな事はありません。そんな事はありませんとも」

雪緒は絆の質問に、ムキになった様に答えていた。

「な、何を言うんですか絆ちゃん。わ、私が、く、暗いからって怖いわけではないでしょう!」

……雪緒さん。自分で暗いのが怖いと言っちゃってますよ。今までは、日中にしか活動して無かったから気が付かなかったが、暗いのが苦手だったみたいだな。

という事はさっきまでは、周囲を警戒していたのではなく、ただ周りが怖かったただけなんですね……。

「ふーん。そうなんだ……。あれ?」

「ん、どうした?」

「……えっ、なんですか?」

「……あ、あそこでなにか白い影がうごいた!」

「——」

「いやああああああああ!! 無理です無理です無理です無理です」

絆が森の先を指さしながら、俺達の質問に答えると、それを聞いた俺達に一瞬の沈黙が訪れる——突如雪緒は絶叫し俺に抱きついてきた。

「うづうづうづうづうづうづう」

雪緒は唸りながら、俺の背中に頭を擦りつけながら、ヒシツと抱きついてきている……何て云うか、色々やわらかい感触が背中に当たって、お兄さん困ってしまいます。

「えへー。やっぱり気のせいだったよ」

「……………」

絆は悪びれずにそう言ってきた……しかし今の雪緒には、絆の科白は届いていないみたいだった。

「——はあ、絆。そう言った冗談は余り言わないように」

「はい。ごめんなさい」

うん。全く反省していませんね。絆は俺の忠告にケロッとした顔で答えてきた。絆と雪緒は城に居た時は、一緒に同じ部屋で暮らして居たので、もしかしたら知っていてやったのかも知れない……絆何て恐ろしい子！？

ともかく俺は、抱きつかれたまま体を捻って振り返り（俺が体を捻っても雪緒は意地でも抱きついてきた）、雪緒の頭を撫でながら慰めた。

「雪緒。大丈夫、大丈夫だから」

俺は、抱きついてきている雪緒の感触を敢えて無視して、髪を梳くしけずる様に撫で、安心させるように笑いかけた。

「ふえええええん、はるかくううん」

「白い影も、怖いものとかいないから……ね？」

「……ほ、ほんと？」

雪緒は上目づかいで、俺に訊ねてきた……なに、この可愛い生き物？ 持ち帰ってもいいですか？

半ばキャラ崩壊気味の雪緒に、安心させるように答えた。

「ああ、本当だ。もし何かいても俺が何とかしてやるから！」

「……う、うん！」

雪緒は俺の答えに安心したのか、抱きつきから解放してくれたが——ただ、俺の右手を雪緒の手が掴んでいるんですけど……。

「……雪緒さん。この手は何でしょう？」

俺が右手を持ち上げて訊ねてみると。

「……ダメ……ですか？」

出ました、必殺上目づかい。遙は9999のダメージを受けた！

「いやいやいや。ダメではないですよ？」

何故に俺も疑問系？ 俺も明らかにテンパってますね。

と云った訳で、左手に絆、右手に雪緒と云うフォーメーションで進むことになってしまった。

……で俺、ライトは何処で持てばいいんでしょうか？

第三話（後書き）

案の定話が進みませんでした。

第四話

「……ん？ あれか？」

ライトの先に照らされた白い物体を見つけ呟いた。

結局ここまで、風呂を創った場所から三十分近く歩く事になってしまった。

実際の距離にしてみたら大した事は無いのだろうが、夜間の森で足場も其処まで良くないとすれば、その位の時間はかかってしまうのかも知れない。

まあその大半は、雪緒を慰めたりした為に、思いのほか時間がかかったのだろうが……。

俺は今両手が塞がっている——別に荷物を持っているのではなく、右手に一少女（雪緒）、左手に一幼女（絆）と云った、非常に歩きづらい状態だ。

流石にこの状況でライトは持つ事が出来ないの、今は絆に持つて道を照らしてもらっている。というか現状の雪緒は余りアテには出来ないの、絆に任せるしかなかった。

辺りは暗くてまともに見れない上に、俺は両手が塞がっており咄嗟に動く事が出来ず、周囲を警戒しながら歩いていたのでかなり気疲れた。

俺は女の子と手を繋ぐのは嫌ではないが——いや、寧ろ大好きだが、それは時と場合による物だと、身を持って理解した。少なくとも魔物が潜んでいるであろう森の中とする事ではない。

ともかく、俺が魔術で探知したであろう、生き物の場所にまで特に何も無く到達した。ライトを照らした先には……何かの動物が蹲っていた。

「お兄ちゃん。あれなの？」

絆はライトを動物に向け、訊ねてきた。

「……ああ、この辺りで間違いないはず」

俺はそう答えると、感度を上げるために範囲15メートル程に絞って、再び魔力を放ち探知を行ったが——反応はライトの先に照らされた動物からしか無かった。

「やっぱり、その動物からの反応みたいだったみたいだな」

「……そう……ですか」

「ふーん」

二人は俺の答えを聞くと、反応こそ薄かったが安堵の表情が見て取れた。

しかし、魔術探知では大まかなサイズしかわからなかったが、予想よりも更に小さく、人でも無かった……まだまだ改良の余地があるな、と考えていると。

「けど、お兄ちゃんの言葉を聞くと、この子って弱ってるんだよね……？」

絆はそう言うと、繋いでいた手を離して動物に近づいていった。

「お、おい、絆。あぶないから——」

「絆ちゃん。あぶないですから離れては——」

俺の雪緒の警告を気にもせず、蹲っている動物の傍らに近づいた。弱っているとは云え、もしかしたら魔物かも知れないのだ、俺達も恐る恐る近づいていった。

「……この子……犬？」

絆は呟くように言っていた。俺も近づき確認すると——ふわふわの白い和毛にじげに包まれ、三角の耳に尖った顔、そして三つにわかれた尻尾。

「うっん、違います。たぶんですけど狐かと……」

絆の科白に雪緒はそう答えた。その言葉を聞き、俺も合点がいった。

「……ああ、確かに狐だな。ただ尻尾が三本ある狐と云えば——」

——妖怪だよな。

複数の尾の獣と云えば、日本の妖怪の代名詞だろう。有名な所で

言えば『猫又』、狐で言えば『九尾の狐』。

しかし、ここは日本ではないし、この子は三尾しかないの、妖怪では無いのかも知れないが。というか魔物の可能性も残っている。ただ旅立つ際に事前に調べた情報だと、この周辺に狐型の魔物の情報は無かったんだが……。

ちなみに最後まで言わなかったのは、雪緒に妖怪と云う言葉に反応されては困ると思ったからだ。

絆は、弱って小刻みに震えて蹲っている狐？　を見て、ポツリと言った。

「この子弱って震えてる……　かわいそう」

絆はそう言い、俺達が止める間も無く、狐に手を翳すと治癒魔術を紡ぎ始めた。

『——慈悲の力。癒しの力よ。この子に光を』

絆の手のひらが薄く輝き、揺らぎだすと、魔術が発動した——が、狐の様子が改善される事は無かった。

「……えっ？　なんで？　なんで効かないの？」

狐は未だ蹲り、弱弱しく震えていた。

絆は、治癒関係の魔術だけは俺が使うモノよりも強力だ。それが効いていないので、絆は混乱していた。

「ちゃんと使ってるのに何で……？」

手のひらが、薄く輝き揺らいているという事は、魔術が発動して

いるという証拠なのだが。

「お兄ちゃん……なんで効かないの？」

絆は困惑した表情を浮かべ、訊ねてきた。絆の治癒魔術が効かない以上、俺が使っても意味はないだろう。ともかく俺は絆の疑問に答える為にも、魔術解析する為《魔術感知》使い、集中してみた。

集中してみたが——絆の魔術は正常に発動していた。と、なると、狐の方に何か問題があるのかもしれない。そう思い見てみると。

「……ん？」

「……どうしたの遙くん？」

俺が首を捻り声をあげると、未だに俺と手を繋いでいる雪緒が訊ねてきた。

「いや。なにかチョット違和感が……」

そう、なにか狐に違和感があるのだ。違和感と云うか不自然さが……。あとこの状況でも手を離さない雪緒というのも、十分不自然かも知れないが。

「違和感ですか……？」

「うーん………あっ!？」

「なにかわかったの、お兄ちゃん!」

俺が声をあげると、絆が訊ねてきた。

「ああ。なにか違和感を感じると思ったら、その狐からは魔力を全^{オド}く感じないんだ」

この世界の生き物は、大なり小なり魔力を持っている。たとえば魔術師で無くとも、人は少しでも魔力を持っているのだ。それがたとえ動物であろうとも、この『ガイア』に住んでいる生物であるのなら、少なくとも魔力がゼロと云う存在はしないし、俺もここまで見たことが無い。

なのに、この狐からは、その魔力が全くと云っていいほど感じないのだ。

「……魔力？」

「魔力……ですか？」

「ああ。二人には見えないのかもしれないが、この世界の生き物には、多かれ少なかれ魔力を持って生きているんだ。ただその子からは魔力が一切感じる事ができないんだ」

俺の言葉を聞いても、二人ともいまいち理解していないみたいだった……まあこれは、魔力を見る事が出来る俺だからこそ、わかることなんだろうけど。

「お兄ちゃん……よくはわからないけど、お兄ちゃんだったらこの子助けられるの……？」

絆は潤んだ瞳で俺に訊いてきた。

「——ああ」

俺の言葉を聞くと、絆は食いかかるように言ってきた。

「だったらお願い！ この子を助けてあげて！」

絆は真剣な表情で俺に頼んできた……はあ、しかたないか。今までこの環境で、特にわがままを言ってこなかった絆が、助けてと真剣にお願いしてきたのだ。それになにより、ここまできておいて見捨てるのも寝覚めが悪い。

まあ万が一この狐が魔物であつて、襲ってきたらその時はその時だ。

「……わかった。俺が出来る事はやってみよう」

そう言い繋いだ手を離し、絆を雪緒に託すと……いや、この場合は逆か？ とにかく俺は、狐に傍らにしゃがみ手を添えると――魔力を移し始めた。

「――グッ。思ったよりキツイな」

誰かに魔力を渡すと云う行為は、初めてだったので予想よりも遥にきつかった。

魔力譲渡は相手に1の魔力を渡す為に、俺の魔力を大体20〜30使う事になった。俺はこの世界の人間では、規格外の魔力を持って居るとはいえ、それでも魔力消費量が半端ない。恐らくだが全快も無理だろうが、状態を改善させるだけでも俺の魔力の9割近くを消費する事になるだろう。

……ここまでやっておいて、今更出し惜しみも無いか。俺はそう考え、魔力を一気に送り込んだ。

「ゼエゼエ……」

「お、お兄ちゃん。どう？」

俺が激しく息を吐いていると、後ろで雪緒と手を繋ぎ見ていた絆は、心配そうに訊ねてきた。

「――ふう……ああ。恐らくもう大丈夫だ」

俺は一息吐くと、安心させるように微笑み答えた。

「ほんとう？ ……よかった」

そう言い、絆は安堵の表情を浮かべていた。

俺は三尾の狐の状態を確認していると――突然真横の茂みがガサリと動き、黒い影が飛び出した。

「遥くん危ない！」

何かに気がついたのか、雪緒が悲鳴に近い声をあげた、それに俺は反射的に狐を庇うようにしゃがみ込んだ。

黒い影は、咄嗟にしゃがんだ俺の右腕を挟り通り過ぎた……。

「――グッ！」

俺は突然に襲われた激痛で、声にならない声をあげた。魔力譲渡で集中していて周囲が疎かになっていたのだろう、迂闊にも襲われるまで気がつかなかった。

確認はしていないが、寧ろ怖くて確認できないが、右腕の上腕の

部分の肉を持っていかれたのだろう、袖口から鮮血がポタリポタリと滴り落ち、真っ赤に染まっていた。あの時雪緒の声が無かったら、恐らく俺の首が持っていていかれていただろう。

ともかく俺は一時的に痛みを無視して、感覚の無くなってきた右腕を無視して、襲ってきた正体を確認した。

ライトに照らされた先に立っていたのは――漆黒の体毛に、紅い瞳、鋭い爪と牙を持つ体長１メートル程の体躯、ハイディングウルフが立っていた……。

「クソッ！　こんな時にハイディングウルフかよ」

俺は吐き捨てる様に言った。

ハイディングウルフは、神光国家プレクスタ 周辺で巣くう魔物だ。その名の通り隠密行動を得意として、獲物に近づきその牙や爪でもって獲物を穿ち殺す。俺が旅立つ上で調べた魔物の中でも、この周辺に出る魔物の中では最悪の部類だろう。

「雪緒！　周囲も警戒してくれ！　こいつらは群れで行動する魔物だ」

そう、こいつらの習性で最も厄介なのは、群れで狩りをするとう事だ――ハイディングウルフが最も得意とするこの暗闇中で、更に木々で周囲は死角だらけ、恐らく周囲に他の仲間も隠れているだろう……状況としては最悪だ。

雪緒は俺の声が届くより前に、絆を背後に庇った状態で、俺が創った《霊刀・雫》を澱みなく構えていた。

——るか、くんを。

雪緒には俺の声が届いておらず、雫を構えた状態で何かを呟いていた……。

「——遥くんを……傷つけましたね……」

第五話（前書き）

戦闘描写難しい……。

第五話

雪緒は能面の様な表情で呟いた。

先程までであった周囲への恐怖や困惑等の表情ではなく、今の雪緒からは表情がストンッと抜け落ち、なまじ美人でもあるのでよけいに迫力があり、もの凄く怖かった。

「零。参りますよ……いいですね」

『イエス。マスター』

そう受け答えをするとゆらりと進みだし、ゆったりとした歩みで真っ直ぐハイディングウルフに進んで行った。

突然の行動で驚いた俺は、再度雪緒に注意を喚起した。

「ちょ、雪緒。周囲にも他の奴らが――」

――いるかもしれない。

と、俺が言い切る前に、横の木の陰で隠れていたハイディングウルフが飛び出してきた。雪緒は不意打ちにも近い形の、先程俺がくらった切り裂き攻撃を、首を傾けると云う行動一つでいとも簡単に躲した。

そして、雪緒の歩みは止まらない、止められない。不意打ちの攻撃に何の反応を見せずに、ただ淡々と躲し歩みを進める。

不意打ちを躲されたハイディングウルフも、体勢を立て直すと、雪緒に向かって構えた。

雪緒はその様子にも一向にも介さず歩みを進める——すると更に隠れていたであろう、群れのハイディングウルフが、雪緒に向かって襲い掛かった。

あるものは爪で切り裂き、あるものは顎で噛み付こうと——しかし雪緒は体を傾ける、または体を捻る、或いは一歩踏み出す。ただそれだけで悉く躲してみせた。どの攻撃でも言える事だったが全て、雪緒の歩みを止めるには至らなかった。

その光景に、絆はライトを照らせた状態で、俺は左手で狐を抱いた状態で、右腕の痛みを忘れてポカンとして見ていた。

森の中は真っ黒に近い暗闇の中で、ライトのお蔭で辛うじて周囲の様子が窺える状態なのだ。ハイディングウルフは体躯が黒く、この暗闇の中ではまともに視認することすら難しい。なのに雪緒は躲すのだ、歩みを止めない最小限の動きで。

周囲に隠れていた何頭かのハイディングウルフ。俺には周囲がよく視認できない上に、動き自体も早く何頭いて、何頭隠れているのかもわからない。なのに雪緒はまるで見えているかの如く攻撃を躲している……。

いや、これが《危機感知》であり《見切り》の恩恵かも知れない——が、これがもしも、雪緒の元々の資質であったのなら何とも言えない気持ちになりそう……。

ともかく、進む。俺達を襲ってきた魔物に目掛けて。

周囲に隠れているモノも、襲ってきたモノも、雪緒を最大の脅

威とみなした様だ。俺や絆を警戒していた奴らも雪緒に向かって唸りだした。

「うふふふふふふふ……。全く騒のなつて無いワンちゃん達ですね。チョット騒が必要かもしれませんね」

『イエス。マスター』

雪緒と雫は何か呟く様に遣り取りをしていたみたいだが、俺や絆の所には、魔物の唸り声やその声自体が小さかった為届かなかった。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!」

唸り声から遠吠えに近い声をあげると、一斉に雪緒に向かって襲い掛かってきた。

雪緒は流石に歩みを止めたが一斉攻撃に何の反応も見せず、無表情で襲ってきたハイディングウルフを見つめていた。

ハイディングウルフの噛み付きが当たる——と、思った瞬間光刃が煌き、噛み付こうとしたハイディングウルフの顎が消失した。

「もう。まったくヤンチャなワンちゃんですね」

そう嘆くように呟くと、斜め後ろと真横から同時に襲ってきたモノに対してバックステップすると、動きが早すぎた為お互いの勢いを殺しきれず、同士討ちをさせた。片方の牙は肩に食い込み、片方の爪は耳を引き裂いた。そして雪緒は、その二頭に向けて雫を真一文字に振り抜く——二頭の手足が飛んでいった。

今まで呆けていた俺は、我に振り返りまで駆け寄ると、ライトを奪い視界を遮るように痛む右腕で頭を抱え込んだ。……って、呆けて忘れていたけど、半端じゃないくらい痛い。

俺はズキズキと痛む右腕を我慢して、雪緒の様子を窺った。

「……………あれ？」

雪緒は先程の様な無表情では無く、何時も通りの柔らかい表情を浮かべ…………いや、今は困惑も混じってはいるが、ライトを持っている俺のほうに向かって歩いてきた。

「…………遥くん。どうしたんですか？」

「……………うん？」

雪緒は不思議そうな表情を浮かべて、俺に訊ねてきた。

「いや、えっと……………ううん？」

いや、何がどうしたって俺の科白でしょう。と、俺が困惑していると…………。

「は、遥くん！ その腕どうしたんですか！？」

雪緒は驚いた様に訊ねてきた。俺の右手はダクダクと今現在と流血しております。

「いや、だからさっき……………」

「と、ともかく治療しないと!」

雪緒は俺の科白を見事にスルーすると、俺の右手をガツシリと掴んできた……って、ギャー! イタイイタイ!

「ど、どうしましょう……どうしたら……」

雪緒さんはパニックの真っ最中です。

「お兄ちゃん……イタイの……?」

その遣り取りに、今まで抱きしめていた絆が顔を上げて訊ねてきた。

「ああ。まあ、それなりに……」

……ゴメンナサイ。ウソです。もの凄く痛いです。ただ男の子は、女の子の前では見栄を張るものだもん。

「でも、いたそう……」

狐を抱いていない肉が抉れた右手を見て、絆はそう呟いた……血に余り動じないってことは、ヤツパリ絆も女の子なんだな。俺は怖くてとてもでは無いが見れません。

すると絆は、俺の右腕に手を添えると治癒魔術を唱え始めた。

『——慈悲の力よ。癒しの力よ。お兄ちゃんを癒して』

輝きだすと——次第に痛みが治まりだし、出血が止まった。

俺は患部を見てみると服は破れ、血で赤黒く染まってはいたが、

腕には損傷の痕が全くわからなかった。

「す——ごいな」

俺は呟く様に言った……流石に俺でも、あの怪我を傷跡一つ残さず治すのは無理だ。やはり治癒魔術に関しては、絆には勝てそうに無いな……。

その様子を見ていた雪緒は、俺の怪我が完治するのを見て、安堵の表情を浮かべていた。

「そういえば遙くん。その狐って大丈夫なんですか？」

雪緒は、俺が左腕に抱いていた狐の状態が気になったのか訊ねてきた。

「ああ、状態は安定していると思う……」

俺は腕の中で、スウスウと穏やかな寝息をたてる狐を見つめながら答えた。

「ともかくだ、ここを直ぐに離れた方がいいと思うんだが、俺は」

俺は今すぐここを離れたかった。ここは魔物の血の金臭い臭いが充満しており、その臭いに惹きつけられて他の魔物が来かねない。先程の事では無いが、魔力が無い俺は、とてもでは無いが戦力にはならない。

雪緒に訊ねたい事もあったが、別にここでもなくてもいいだろう。

「そう……ですね。はい、そうしましょう」

雪緒は、周囲が真っ暗だったのを思い出したのか、俺の服の裾を掴んでそう答えた。

第六話

帰る際は、流石に行きの様におてつないでとはいかなかった。

主な理由は俺なんだが、左腕では未だ眠りにについている狐を抱いているので塞がれている、空いているはずの右手も先程の負傷で、怪我自体は完治しているのだが、幻痛と云うのだろうか違和感が半端なかった。今まで負ったことの無いレベルの怪我を受け、脳が混乱しているのかも知れない。

ともかく、絆にライトを預けて一歩先を先行してもらい、俺は狐を抱きながら後ろに続き、雪緒は俺の服の裾を掴んで後に続いた。

ふと気になり前を歩く絆に目を向けた、魔物惨殺時に咄嗟に視界を隠した、確認はしていないが特に動じた様子は無いので、上手く隠せたと思いたい。周囲も暗かったので多分大丈夫だとは思うのだが、敢えて蒸し返して訊くような話題でも無いだろう。あの光景を見て動じない子供と云うのは無いと思いたいから。

木々に覆い茂られ真つ暗だった暗闇から、月明かりに照らされた森の外に出た。風呂を創った野营地まで戻ってくると、俺は風呂の用意を始めた。

俺自身が自分の返り血で赤黒く染まっていたからだ。絆に関して

も視界を隠す際に抱きしめてしまったので、俺の血で髪の毛や顔、服などがベツタリと赤黒く染まっている……ある種のホラーだった。事情を知らずに見た人がいれば悲鳴を上げる事請け合いだろう。

雪緒も、激しく動いたからか冷や汗かはわからないが、汗をかいていたのもう一度風呂に入りたそうにしている。

……あと、狐が獣臭い。野生だったから何処にいたのかはわからないが、乾いた雑巾の様な臭いが漂っていた。

ただ、鞆からテントと浴槽を取り出した方がいいが、途中で俺は今魔力がカラッポだと云う事思い出した……。

無理をすれば湯を入れることは出来るだろうが、そうすれば万が一先程の狐の様な状態に、今度は俺がなってしまういそうである。そこまでリスクを負ってまで俺が入れる必要は無いだろう。というか命がけの入浴とか俺は嫌だよ。

と、云うわけで、雪緒に頼んで湯を入れてもらうことにした。湯の入れ方自体は、浴槽を創る時に横で眺めていたので、特に説明しなくても出来るみたいだった。

「……なんというか、今日は雪緒に迷惑掛けてばかりだな」

「うっん。よくわからないけど、遥くんには今までお世話になっていたんだから、この位はどうって事無いよ」

魔術で浴槽に水を溜めながら、雪緒はさも当然と云った表情で答えた。

そして水がある程度溜まると、今度は浴槽に向けて火の魔術を雪緒は行使した。すると次第に、グツグツとお湯が煮えてきた……つて、グツグツ!?

「ちょ、雪緒。火力強すぎ、こんなのに入ったらいい出汁が取れてしまう」

「……あつ！ いけない。……どうしましょう」

肉を入れたらしゃぶしゃぶとか出来そうな温度だな。

「とりあえず、水を足して温度を調整しよう」

「そ、そうですね」

そう言い気を取り直したのか、水を足して温度を調整していた。

「……うん。ちょうどいいくらいかな」

湯船に手を入れ掻き混ぜながら、温度を確かめ雪緒はそう呟いた。

「そつか。じゃあ先に入りなよ」

「……えっ？ いえ、遙くんこそ先に入ったほうが」

「いやいや、俺が先に入ったらお湯が汚れてしまうし、それに……」

焚き火の側でうつらうつらしている絆を見て俺は答えた。ゴタゴタもあってかなり夜も更けている。疲れもあって今の時間は子供には厳しいだろう。

「……そう、ですね」

俺が言いたい事を理解したのか雪緒はそう答え、絆に近づいて行き肩を揺すりながら言った。

「絆ちゃん。お風呂の準備が出来ましたので、眠っちゃう前に一緒に入りましょう」

「うー」

絆はそう言いながら、眠い目を擦りながら答えていた。

「さあ、ね？ 早く入っちゃいましょう」

「うー、うん」

そんなやり取りをしながら、絆は雪緒に手を引つ張られて浴槽のあるテントに入っていた。

——ふむ。

手透きの時間が出来てしまった。流石にこの格好のままで寝る気は起きない。血の金臭いにおいと狐を抱いていた獣臭で、なんとも云えないハーモニーを醸し出していた。ぶっちゃけ言えば臭い。

……はあ、仕方が無い。二人が風呂から上がるまで狐の様子を見ていることにしよう。

そう思い近寄ると、月明かりに照らされて森の中でははっきり確認できなかったが、とても美しい狐だと今は確認できた。

純白の和毛に、ふわっふわの三本の尻尾……ふわっふわ……さ、さわりたい。ヤバイ、もの凄くもふもふしたい。

俺は誘惑に耐え切れずに、しゃがみ込み尻尾に左手を伸ばそうと

すると——丸まってスウスウと寝息を立てて寝ていた狐が、ピクツと耳をたて起きた。

……ヤバイ、俺の疚^{やま}しい気配で起こしてしまったかと思い、手を伸ばした状態で固まっていると、狐は徐^{おもむろ}に立ち上がり、周囲をキョロキョロと見回し確認し始めた。

俺は手を伸ばして固まった状態で様子を見てみると——狐と目が合った。

「キュ！」

目が合い狐はそう吼えると、俺に襲い掛かって——は、こなかった。狐は飛び掛るように近づき俺の足に顔を擦り付ける——まるで人懐っこい子犬のようだった。

俺は恐る恐る抱き上げると、特に抵抗も無く大人しくしていた。駈しにと犬にするように、首の辺りを一指し指で撫でみると、気持ちよさそうに目を細めていた。

俺は先程からの誘惑に耐え切れずに、抵抗が無いことを良い事に、抱きし三本の尻尾をめもふもふして恍惚していたが——ムワツとした獣臭で気持ちが悪くなってきた……。

「……うえ。お前も風呂に入らなきゃダメだな」

俺は嘔吐きを我慢しながら言うと、狐はキョットンとした表情をして首を傾げていた。

「——るかくん。お風呂上がりました」

俺が狐の尻尾に夢中になっている間に風呂から上がったようで、

タオルで髪を拭きながら俺に言ってきた。

絆は眠けが限界だったようで、風呂から上がり着替えが済むと、焚き火の近くに立てておいたテントに向かっていった。

「遙くん……あれ、その仔目が覚めたんですか？」

雪緒は俺の腕の中でモゾモゾしている狐に気付き訊ねてきた。

「ああ」

「大丈夫だったんですか……？」

もしかしたら魔物かも知れないのだ、心配になったのだろう。

「たぶん大丈夫だと思う、寧ろ人懐っこいヤツだと思うぞ」

「そうなんですか？」

そう訊ねながら雪緒は、恐る恐る頭を撫でてみようと手を伸ばすと……。

コンッ！

「——キャッ！」

狐は雪緒に吼え、撫でようとしていた手に噛み付こうとした、雪緒は驚いて咄嗟に手を引き短い悲鳴を上げた。

「は……えっ？」

俺もいきなりの事で驚いた……俺のときと対応が違うぞ。

「……私になにか変なことしました？」

「いや、特には無いと思うが」

雪緒はショックを受けた表情をしていたので、俺は咄嗟にフオロ
ーを言った。

「た、たぶん。目覚めたばかりで気が立っているんだよ、明日にな
れば大丈夫だと思うから……」

俺の腕の中で大人しくしているのにそんなことは無いのだろうが、
雪緒を慰める為に咄嗟にそう答えていた。

「……そ、そうですね」

「ああ、雪緒も色々あって疲れているだろうし、今日は早く休んだ
方がいい」

「そう……ですね。うん、そうします……おやすみなさい」

「うん。おやすみ」

そう言つと雪緒は絆が入っていたテントに向かっていた……。

——ふう。俺は安堵に近い溜息を漏らすと、狐を目の前まで抱き
上げた。

「おい、おまえ。噛もうとしたらダメだろ！」

俺は犬を躰が如く言ってみたが、狐はよくわからないと云った表情で首を傾げた。

「……はあ。言った所で通じるわけが無いか」

俺はそう呟くと、仕方無しにとお風呂に向かった。テントの中に入ると置いてあった鞆の中から着替えとタオルを取出し、血で汚れた服を脱ぎ全裸になると、風呂桶代わりに使っている手鍋で掛け湯をして、狐にも同じく掛け湯をすると――

『——キャウ！ あつーい！』

いきなり俺の頭の中に声が響いた。

第七話

「……………はいつ？」

俺は突然頭の中に響いた声に驚き、周囲を見回したが——誰もいなかった。もしかしてとも思い、テントの外を確認もしたが、パチパチと火が消えかけている焚き火が在るくらいで、やはり誰もいない。

「んん？ 俺の気のせいか…………？」

俺はそう呟き、改めて湯船に浸かうとして、目の前でプルプルと体の滴を振るっていた狐を抱き上げ、お湯に浸かると——

『キャウウウウ、あつーい』

再び頭の中で声が響いた——しかし、周囲には声の主は見当たらなかった…………。

えっと…………あれ？ 俺幻聴でも聞くようになったの？ 俺は声の元がわからず困惑していると。『キュウウウ』

声が頭の中でまた響き、俺はもしかやと思い、一緒に湯船に浸かっている真っ白い三尾の狐を見つめた。

「…………もしかして、お前か？」

俺は狐に訊ねてみるが、案の定と云うか「キュ」と鳴き首を傾げ、俺の問いに答えた。

「あ、あははは……、なわけ無いよな」

うん。幾らここが異世界だろうと、狐が喋る訳が無いだろう。そうだ、これは幻聴に違いない、きつと、さっきの戦闘で怪我を負ったことで、一時的に頭がおかしくなっているんだろう。

俺は精神衛生上の為に、こじつけに近い考えで納得していると……。

『ふいふい』

「……つて、やっぱりお前じゃねえかよ！」

俺は湯船の温度に慣れて、恍惚気味の表情を浮かべている狐に向かって突っ込みを入れた。

「うお、しまった。思わず狐に突っ込みなんかしてしまった」

ヤバイ、この狐侮れねえ……なんて埒も無い考えをしていると、狐は俺の言葉を理解していないのか、いきなりの大声で驚いた位で他にそれと言った反応は無かった。

……しかし、どういう事だ？ 狐の言葉は、俺にはある程度理解できるみたいだが、俺の言葉は狐に理解されて無いみたいだった。

あれ？ そう云えば聞こえた、では無く。頭に直接声が響いたんだよな……ということは、念話か何かの類なのか……？ 尻尾が三本ある時点で、普通の狐では無いと思ったが、そう云う特殊な力を持つ種族なのかも知れない。

「なあ、他の言葉は言えないのか」

俺は狐にそう訊ねてみたが、やはりと云うか言葉は通じないみたいだった。

——ふむ、狐に俺の直接の言語は通じないと言う事は、俺も念話を使えば会話できるのか……？

俺は試しにと、狐を呼びかけるようにして念話を行ってみた。

『——い、聞こえるか？』

ビクッ！

狐は突然何かに反応するかの様に驚き、周囲をキョロキョロと見回し始めた。

『ふえええええ。なにいなにい』

様子を見るに俺の念話が届いたのだろうか、狐の声らしき物が俺の頭に響いた。

『おい、俺の声が聞こえるか』

『だ、だれですかあ？』

狐は俺の声が聞こえたのだろう、周囲を見渡し確認しながら訊ねてきた。

『俺の言葉が理解できるのか』

『は、はい。で、だれなんですかあ？』

予想通りと云うのだろうか、念話だと狐と会話が出来るみたいだった。……しかし、念話なんてした事無かったのに簡単に出来るもんなんだな。流石は俺。

ともかく狐の問いに答える為に、目の前まで抱き上げ向かい合って答えた。

『俺だ、俺。わかるか？』

『……もしかして、ぬしさまですか』

……主様って俺のことか？ 周囲を確認してもそれらしい人物は確認できなかった。

『主様ってのは俺のことなのか？』

俺は狐にわかりやすくする為に狐を片腕で抱き、右腕で自分を指さしてみた。

『はい、そうです。ぬしさまがぬしさまです』

主様が主様らしい……意味がわからん。

『……なんで俺が主様なんだ？』

『だってぬしさまぁ。くーとおなじにおいするう』

……よくわからないが、俺が獣臭いって事でしょうか？ その言葉聞き軽くショックを受けていると。

『ぬしさまぁ。このあたたかいのなんですかぁ？』

狐は俺の腕の中で、チャプチャプと叩きながら訊ねてきた——なにこれ、思わず抱きしめてしまいそうなくらい可愛いじゃないか！

『くうう。ぬしさまくるしい』

……あれ？ 思わず抱きしめていました。

『おお、悪い、悪い』

俺は抱擁を緩めると、こふこふと狐は咳をしていた——この仔は俺も萌え殺す心算らしい、一々動作が愛らしすぎる。

俺は気を取り直して、狐の問いに答えてあげた。

『この温かいつてのは、お湯の事だな』

『おゆう？』

『ああ、そっだ……』

狐は、いまいちよくわからないと云った風に「キュ」と鳴き首を傾げていた。

『それで、俺からも訊きたいんだが——お前の名前って、くーでいいのか?』

先程自分の事を「くー」って呼んでたよな。

『……なまえってなんですかあ?』

……はいつ? さっき自分の事を呼んでたよな……もしかして、名前と云う物自体理解できて無いのか。それとも先程言った「くー」って云うのは、この狐の事ではないのか?

『いや、だから。お前の事を何て呼べばいいんだ?』

『……? ぬしさまがすきによべばいいよお』

好きな様になって……。

『お前、名前無いのか?』

『……うん?』

反応は鈍いが、狐は名前を持っていないらしい……。いや、わからないのか?

『と、いうことは。俺が名前をつけていいのか?』

『うん! ぬしさまがつけてえ』

——ふむ、名前ねえ? 何かいいのあったっけ。

『……じゃあ、葛葉だ』

『くずはあ？』

『ああ、これからお前の事は、葛葉って名前だ』

自分で言っていた「くー」って呼称と、日本の伝説上の狐の名前から引用させてもらった……あれもたしか白狐だったよな。

『くずはあ。くずはあ』

狐改めに葛葉は、名前が気に入ったのか何度も繰り返していた。

『それで葛葉、少し訊きたいんだが』

俺は葛葉に質問しようと声を掛けてみたが――

『ふえええ。目がグルグルするう』

葛葉は頭をフラフラと揺らしながら言っていた……って、ヤバッ！湯中りしてのぼせたみたいだった。体の小さな葛葉に、俺と同じ感覚での入浴は酷だったか。

俺は慌てて葛葉を湯船から抱き上げた。

『お、おい。大丈夫か？』

『ぬしさまあ。くずはまわってるう』

大丈夫では無かったみたいだった。俺は腰にタオルを巻き鞆から水の入ったペットボトルを取り出すと、体を冷ませる為にテントの

外に出て葛葉を介抱してあげることにした。

——ハア。雪緒も絆も寝てくれていた助かった。

大自然で真っ裸な俺。まさにファンタジー……。

第七話（後書き）

今まさに新たなファンタジーが始まり………ませんよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9710w/>

愚者は踊る

2011年11月20日19時40分発行